第四章　支えた人々

東海骨髄バンクの設立総会から一カ月間で、ドナー登録希望者からの電話は一千本を超えた。それまでの十四カ月で二千本だから、殺到ぶりがわかろうというものだ。募る会の発足から、これらの電話の多くを受けてきたのが、事務局にボランティアとして詰めた人々だ。

また、資金面での支援をつづけてきた団体や、ドナーPRのために〝人寄せパンダ〟も辞さない有名人もあらわれ、東海骨髄バンクを支える力は各方面に及んだ。

ボランティアの力

名古屋市北区の奥村よしみさん（五九）は八八年三月に長男の敏夫さんを急性リンパ性白血病で亡くした。前年五月に骨髄移植をして社会復帰直前まで回復したのに、出社前日に再発がわかり、一カ月もたたないうちに二十九歳の生涯を閉じた。

「勤務先が大きな会社でしたから、快気祝いのおまんじゅうをたくさん用意していたんです。でも、移植のおかげで五カ月長生きできたと、感謝しながら亡くなりました。先生にも看護婦さんにも感謝の言葉を残しましたね。私も病院の医療事務をやっていましたけど、治療中に涙が出て仕方ありませんでした。新聞を見て、何かお手伝いできればと思いました」

初めての仕事は、電話の受け付けだった。とにかくよくかかってくる。奥村さんは、新しい弁当箱を買って、それに昼食を詰めて事務所にかよった。

「患者さんからの電話は辛かったですね、毎日泣きましたよ。息子と同い年くらいと思える方から

の電話で、『患者登録したのに、ちっとも連絡がない。ぼくのことを忘れているんじゃないのか』と言われたときには、そうじゃないのよって飛んでいって説明してあげたいほどでした」

忙しさは大谷さんも変わらない。左手に受話器、右手に箸を握っている姿を、奥村さんは何度も見ている。そんな大谷さんの姿に、初めのうち奥村さんは複雑な思いだった。

「大谷さんと息子の年齢が近いからでしょうか、元気な大谷さんを見て、うらやましくて仕方ありませんでした。息子は野球で入社するくらい健康でしたし、同じ移植で片方は死ぬなんてどういうことかという気持ちが強かったので、いま考えると大谷さんに悪いことをしたと思っています」

奥村さんは、寄付者に贈る感謝状の書写も依頼された。ドナーには、心から感動するという。

「本当にいい人ばかりですよ。こんな人がいることを、近所の人にも伝えました。大谷さんがテレビや新聞に出ると、ドッと電話がかかってきましたけど、財団ができてから少し減った感じがします。我が身に降りかからないと、わからないものなんでしょうか」

名古屋市東区の大島潤子さん（五五）も、身内が病気でなかったら、関心がわいたかどうかわからないという。大島さんは、八八年九月に夫の重光さんを五十三歳で亡くした。多発性骨髄腫だった。

「いま思い出しても悔しいんですが、主人はとても献血に熱心で、発病してからもやっていたんです。ところが、ずっと前は自分の手術で必要なときにはもらえたのに、制度が変わってしまったようで、血小板を集めるのが大変でした。元気なころ一生懸命やっていても、こんな目に遭うんだね

えって、主人も残念そうでした」

大島さんの仕事は、資料の発送が中心だった。

「初めのうちは電話も受けていたんですが、一番印象にあるのは女性の方で、大谷さんと同じ症状だから、病気も同じにちがいないと、延々とお話しになるんです。事務所には私ひとりでしたから、最後にお医者さんに相談なさったらと言って切りましたが、ずいぶん長い電話でした」

普通は、若いスタッフも事務所に詰めている。

「私たちが年上ですから、それなりに気配りをしたつもりなんです。でも、ときどきは意見が合わないこともあって、大谷さんに『こういう言い方はしなくてもいいのに』なんて、告げ口みたいなことを言ってしまって、申し訳なかったと思っています」

奥村さんも大島さんも、大谷さんの母巻枝さんと同世代だけに、巻枝さんから「無理をしないように、娘にいってください」とずいぶん頼まれていた。

「電話は夜もかかってくるんです。私たちは夕方には帰りますから、あとの電話をすべて大谷さんが受けていたはずです。『五分でいいから横にならせて』と、気兼ねしながらおっしゃったこともありますが、とにかくすごい頑張りでしたね」

愛知県海部郡の安江百合子さん（三九）は、長女の理佳ちゃんを小学校一年で亡くした経験を持っている。理佳ちゃんのかさぶたから血が止まらなくなったのは八七年十二月だった。調べたら血小板が六千しかなく、重症再生不良性貧血と診断されて名古屋大学病院に入院した。

「急性盲腸になったりアクシデントもあったんですが、移植については最初から『ダメ』ということで、話もきいてもらえませんでした」

九カ月の闘病生活だったが、八八年九月に亡くなった。その九カ月は、大谷さんが移植を受け、退院してから募る会を結成して、第一回シンポジウムの開催にこぎつける時期と重なる。

「入院直後に、大谷さんと親しかった患者さんのお母さんに、大谷さんのことは聞いていました。でも、うちは移植できないと言われていましたから、あまり関心を持っていなかったんです。そのうち出会う機会があって、お話を聞いたりしているうちに、大谷さんの生き方に感動したんです。再発の不安をたぶん抱えていたと思うんですが、それでいてあのパワーでしたからね」

封筒の手書き作業や、電話の受け付けなどを中心に手伝った。

「患者家族の電話は、気持ちがわかるだけに辛いものがありました。冷静じゃない人もいましたし、一緒に泣いたこともあります。心を動かされたのは、ご主人とお子さんを亡くされて、残ったもう一人のお子さんも病気で失った方が、寄付をしてくださったんですね。あ、私よりもっと気の毒な方がいるんだと思いました。バンク運動に携わっていなければ、自分だけが不幸だと考えがちですが、そうではないとわかりました」

夫の尚幸さん（四〇）ともども、ドナー登録をした。

「ドナー希望者は若い人が多かったようです。日本人はボランティア精神が少ないと思っていましたが、九州や北海道といった遠くのほうからの電話も受けましたね。年齢超過の方に『それじゃあ

ほかに手伝えることはないか』と聞かれて、公的バンク設立の署名を広げてくださいって、お願いしたことがありました。だから、公的バンク発足のときは『やった、大谷さんや先生方の努力が実ったんだ』と思いました。お世辞じゃなくて、皆さん立派な方ばかりですから、ボランティアが集まってくるのも、人柄にひかれてじゃないでしょうか」

今はスーパーマーケットで総菜づくりに携わっているが、事務局の要請があれば、仕事を休んでも手伝いたいという。そうした強い気持ちになるには、あるきっかけがあったからだが、それは「エピローグ」で明かすことにしよう。

名古屋市中区の朝比奈昭治さん（五九）邦子さん（五六）夫妻は、募る会の事務局のすぐ近くで麻雀店を経営している。長女の千明さん（二五）が急性骨髄性白血病と診断されたのは愛知教育大学付属中学三年の三学期だった。

病院の一室を借りて名古屋市立高校に合格したが、闘病を考えると高校生活が長引くこともあるため、改めて自宅に近い私立高校を受験しなおした。三年間で卒業し、短大に入学してすぐ再発したのだ。

兄の孝好さん（二九）とのＨＬＡ一致がわかったのは発病直後だが、移植を受けたのは八八年八月だった。大谷さんの七カ月後である。

「ボランティア組織も知りませんでしたから、血小板輸血の確保に困ったんです。でも、店に名古屋大学医学部の学生さんが常連で来ていましたから、大勢の方から協力を得ました。それがなかっ

たら、今の娘があるかどうかわかりませんね。病気の発見のときも、勝沼内科からの伝統がありますから、早かったんだと思っています」

千明さんは九二年二月から、アメリカで留学生活を送っている。

「お手伝いするかどうか、実際はずいぶん悩んだんです。娘は本当に治ったんだろうか、再発してしまったら困るし、なるべく距離をおいたほうがいいかなと思いながら、完全な回復をみてからにしようと考えていたんです。でも、ドナーも見つからずに亡くなる人がいますし、なんだか大谷さんの力に押されるような感じになりました。何よりも同じ町内ですから、協力することにしたんです」

邦子さんが資料の発送事務などを手伝っていたが、今は別の支援をしている。

「バンクにも潤いがあったほうがいいでしょうし、著作の『霧の中の生命』を買って、全国の短大に送っているんです。そろそろ短大には送り終えてきたので、高校に広げようかと考えているところです」

それと、麻雀店の客が飲むコーヒーを一杯百円にして、それを蓄えて募る会に贈っている。店の屋号は『チャンス』である。開店するとき、「〇〇荘」といった普通のものにしようとしたら、長男の孝好さんが横文字がいいと提案したのだ。骨髄移植推進財団のパンフレットのタイトルが、同じ「チャンス」である。

「大谷さんの真意はわかりませんが、私たちは名誉なことだと思っています。そもそも、娘もチャ

ンスに恵まれたんですから、いい名前だと喜んでいます」

ライオンズクラブが全面支援

東海骨髄バンクが設立総会を終えてほぼ一カ月後、八九年十一月十九日付の中日新聞『この人』欄に、大谷さんが取り上げられた。日曜の朝刊とあって、名古屋市天白区の設計事務所社長尾崎光治さん（六四）は、ゆったり新聞を読み進めているうち、この欄に目がくぎづけとなった。

「明日をも知れぬ病気から、移植を受けて助かっても、何年か経ないと本当に成功したかどうかはわからない病気ですよね。そういう不安を抱えながら、自分の命をかけて同じ白血病の患者さんを救おうとしているのをみて、非常に感動しました」

尾崎さんは感動しただけにとどまらなかった。自ら支援の行動に移ったのである。うまい具合に名古屋瑞穂ライオンズクラブの会員でもあった。このときは第一副会長で、翌年七月からの会長に内定してもいた。

「あえていえば、ライオンズクラブは弱者といいますか、そういう方々に援助しようという姿勢があるわけですが、大谷さんの姿を知って大いに反省したんです。ライオンズの姿勢は、大谷さんの足元にも及ばないじゃないか、とね。それなら、ほっといては面目が立たない、少しでも近づかせていただこうと考えました」

すぐ電話して大谷さんと連絡をとった。さっそく二十九日の委員長会議で説明してもらうことに

街頭署名・募金活動に取り組むライオンズクラブの会員。右側は大谷さん

なり、北折さんや母の巻枝さんと三人が出席したのだ。

「経験を語っていただき、出席した十人は全員が感銘を受けました。希望をお聞きして、なんとか私たちの事業にできないものかと話し合ったんです」

時期がちょうどよかった。七月から始まるライオンズ年度の、後半の奉仕事業を検討するころだったのだ。会長の森島正視さん（六八）は外科ながら医師で、幹事の萩原道男さん（六一）は提案者の尾崎さんをライオンズクラブに誘ったスポンサーだ。直接担当することになる保健薬害三献糖尿病委員長の川口幸男さん（六一）も、こうした事業には深い関心を持っていた。瑞穂ライオンズの事業に骨髄バンク運動を加える条件は、非常にうまくそろっていた。

推進プロジェクトとして取り組むことが決まるのも早かったが、実際の活動もこれまた電光石火だった。しかも、ライオンズクラブの支援策というと、

金銭援助が中心と思われがちだが、瑞穂クラブは公的骨髄バンク早期実現を求める国会請願用の署名活動や、市民へのPR、全国のライオンズへの協力要請などに取り組んだのである。

九〇年二月の例会には大谷さんを講師に招き、その席で四千五百人分の請願用署名簿と、東海骨髄バンクへの助成金五十万円を贈呈した。このときの署名簿は、ライオンズの関係者が多かったが、三月から会員が街頭に立っての署名活動にも乗り出した。

折から、九〇年度の役員選考が進んでいて、愛知県全体をカバーする334—A地区のガバナーに、墨武司さん（六七）の就任が決まった。瑞穂クラブ関係者は「好機到来」と喜んだ。墨さんは、愛知県葉栗郡で医療法人の代表を務めているが、専門は内科医だ。しかも、名古屋大学医学部で血液内科を学んでいるから、まさにうってつけの人だった。

「名大第一内科の後輩も東海骨髄バンクに参加していますから、情報も集めやすいんですね。愛知県内にはライオンズの会員が八千人いますので、瑞穂クラブと同様に署名活動にも取り組みましたし、大谷さんには八十カ所くらいの講演をお願いしました。公的バンクは発足しましたが、すべてを国におんぶするわけにはいかないでしょうから、引き続き応援態勢をとっていきます」

墨さんは、九一年十二月に発足した骨髄移植推進財団の評議員に就任した。瑞穂クラブの尾崎さんも、まだまだ運動の必要があるという。

「財団ができてから、全体的に運動が終わってホッとしたという雰囲気があるんです。ところがまだ不足している部分というものは、いっぱい残っています。これからもいろんな形で支援をつづけていきます」

ライオンズクラブには、もともと「三献運動」というものがある。歴史の長い献血に加え、アイバンクと腎バンクの運動を総称してこういうのだ。334—A地区では、これに骨髄バンクをプラスして「四献運動」を展開してきたが、九三年度からは334複合地区全体に広がった。これは複合地区の献眼・献腎・献血推進委員会委員長に墨さんが就任したからでもある。九三年二月に名古屋・都ホテルで開かれた第十一回全国アイバンクシンポジウムでは、全国のライオンズクラブが骨髄バンク運動に全面的に協力することを確認した。

ライオンズクラブ334—A地区が東海骨髄バンクに寄せた支援金は、総額で三千六百万円近くに及ぶ。

人寄せパンダを自任

最大の〝人寄せパンダ〟は、なんといっても大谷さんであるが、その大谷さんが、あるシンポジウムでこんな〝アブナイ発言〟をした。

「わたしが男だったら、絶対この人と結婚していると思います」

名指しされたのが、歌手の刀根麻理子さんだ。名古屋地区では、CBC（中部日本放送）テレビが毎週土曜朝に放映の「秀才組！　土曜チェック」という生番組にレギュラー出演している。

骨髄バンク運動でのデビューは、九州骨髄バンクが九二年五月二十二日に佐賀市で開いた「刀根

麻理子チャリティーコンサート」だった。このとき、大谷さんと一緒にトークショーで骨髄バンクの意義を語ったのである。評判がよかった。そこで、直後の三十日に開かれた東海骨髄バンクシンポジウムでも、プログラムの一環にふたりのトークショーが組み込まれた。

そもそも骨髄バンク運動にボランティアとして加わることになったきっかけは、九一年八月に東京で開かれた「チャリティーイベント」だった。

高校時代の担任教師だった岸川皓さん（六七）が、児童書『金色のクジラ』をアレンジした朗読劇をそのイベントでやることになったことから、人集めのタレントとして、かつての教え子である刀根さんに、まず本を送ってくれたのだ。その本の作者は岸川さんの妻悦子さん（五七）で、幼い兄弟が骨髄移植によって白血病を克服する話だ。今も、各地のシンポジウム会場で即売されているほか、地域によっては読書感想文コンクールの課題図書にもなっている。岸川さん夫妻は、九二年五月に茨城骨髄バンクを広める会を発足させた。

ロサンゼルスから帰国したばかりの刀根さんには、時間の余裕がなかったのだが、久し振りに恩師にも会いたいと考え、イベント会場に出かけた。岸川さん夫妻の娘さんが児童書を基につくった歌を、無難に歌えばいいくらいに思っていた刀根さんをびっくりさせたのは、ボランティアの生き生きとした姿だった。

「そういうイベントそのものが初めてでしたが、終わってからボランティアの方々と話す機会があって、無償の奉仕活動をやっている姿に心を打たれたんです。いろんな職業の人が集まってきていましたから、そのときは広い意味でのボランティアのお手伝いができればいいと考えていました」

それが骨髄バンク運動に絞られていくのは、もうひとつの体験があったからだ。八九年夏に男性の友人を白血病で亡くしていたのである。

「白血病といえば、テレビ番組の『赤い疑惑』で、ヒロインの白血病患者を山口百恵さんが演じたくらいの知識しかありませんでしたから、男性が白血病になるなんて信じられなかったんです。発病は亡くなる一年前でしたが、一時は元気だったのに、いよいよ移植が必要というときになって、妹さんとのＨＬＡ一致がわかったのに、もう移植できない体調になっていました。悔しくて仕方なかったんです」

八月のイベントを手伝ったボランティアに骨髄バンク関係者がいて、勧められるままに骨髄移植関係のビデオやボランティアグループの会報を見た。しばらくして大谷さんの『霧の中の生命』に目を通し、九二年二月の骨髄バンク事業開始記念シンポジウムにも出てみた。五月の茨城骨髄バンクを広める会の設立シンポジウムに招かれたときは、もう気持ちは骨髄バンク運動へのボランティア参加に決まっていた。同じ時期に、大谷さんとの出会いがあったからだ。

「名古屋のホテルに大谷さんと中堀由希子さんが訪ねてきて、瞬間にお互いが意気投合してしまったんです」

すぐあとに佐賀県でのチャリティートークショーと、名古屋での東海骨髄バンクのシンポジウムだった。名古屋骨髄献血希望者を募る会の会員にもなった。ボランティアグループに入ってまで活

ケント・デリカットさんとともにバンク登録し、
報道陣にとり囲まれる刀根麻理子さん

動する有名人は、ほかに例がない。

タレントのケント・デリカットさんとバンク登録するため、そろって日赤中央血液センターを訪れたのは九二年六月だ。登録と採血の模様は、その日のうちにテレビ各局のワイドショーで放映された。

「芸能人というのは影響力が強いですから、運動を浸透させるためには、人寄せパンダでいいと思っています。命で命が救えるということを、とにかく粘り強く訴え続けていきます」

九二年五月の名古屋シンポジウムでは、刀根さんが歌手のさだまさしさんにインタビューして、骨髄バンク運動への思いなどをさだまさし自身が語ったテープを会場に流した。

ことわるまでもなく、刀根さんのバンク運動は個人としての取り組みだ。歌手としての

仕事が入っているときは動きようがないが、そうでなければ各地のシンポジウムに可能な限り参加したいと考えている。単独でということはあまりなく、どちらかといえば大谷さんとのトーク形式が多く、そのあたりで冒頭の〝アブナイ話〟が出てくる背景があるのかもしれない。

九二年十二月のドナーに感謝する集い、いわゆる忘年会では、三次会で「即席掛け合い漫才」を大谷さんと演じたが、息が合っているのもさることながら、話術のうまいふたりの掛け合いには拍手喝采だった。歌手で売れなくなっても、道は開けるにちがいない。おっと、余計なお世話だと、刀根さんに叱られそうだ。

八四年に歌手デビューした刀根さんだが、骨髄バンク運動は確実に内面を変えたようだ。同時に、九三年に所属プロダクションが替わったこともあり、芸能活動にも幅を広げたいと考えるようになっている。

「テレビ出演は極力ことわってきたんです。普通の顔をして街の中を歩けなくなるのが、とっても嫌ですから。CBCは例外中の例外なんですよ。でも、中堀さんが亡くなったりして感じるのは、骨髄バンクをもっと広めるためには、そんなこと言っていてはいけないということなんですね。これからは、なるべく出番を多くして、機会あるたびにドナー登録を訴えつづけていきたいと思います」

女優としてドラマ出演をしてもいいと考えるようになったというから、これからはテレビで刀根さんの姿をもっと見られるにちがいない。いやいや、そういった、よそ行きの表現をするより、刀

根さんの活動分野がもっと広がるよう、骨髄バンク運動に理解を示す皆さんにお願いしよう。刀根さんにエールを送ろう！　日本を代表する芸能人になったとしても、初心を忘れるような人では決してない。

さて、素顔の刀根さんは、意外にひょうきんなところがある。そこが魅力でもあり、ずっと持ちつづけてほしいキャラクターなのだが、最後は地球レベルに広がる刀根さん自身の言葉を紹介しよう。

「とても長い地球の歴史の中で、人間の一生なんてほんの一瞬にすぎません。その一瞬の時間を共有しているのが、いま生きている私たちだと考えると、全人類が一つの家族のように思えるんです。身内が困ったときに手を差し伸べるのが家族なんですよね。一瞬の時間を共有している神秘さと、魂はみんな平等ということをもう一度認識しなおしてみると、命で命が救える尊さというものが、ものすごく大きなものとして、自分の胸の中に入ってくる気がします。自分自身のことを考えるのと同じ次元で、他人のことを考えたいんです。骨髄移植は、そういうものをすべて含んでいると思えてなりません」

日本骨髄バンクからは、二次検査の要請があって、データセンターへ飛んでいった。早くＭＬＣを経て、骨髄提供できることを心待ちにしている刀根さんだ。

九三年五月に開幕したサッカーのＪリーグは、日本のスポーツ界を大きく変えた。九三年前期優

勝を果たした鹿島アントラーズは、毎試合のマッチプログラムに、骨髄バンクへの協力を呼びかける文字を印刷した。一方、個人として協力しているサッカー選手が、名古屋グランパスエイトのゲーリー・リネカーさん（三二）である。

イギリス人のリネカーさんは、〝グラウンドの紳士〟といわれる。ゲーム中、これまでに一度も警告を受けたことがないからだ。九一年には国際サッカー連盟からフェアプレー賞も受けており、Ｊリーグのゲームでも、ほかの選手ならくってかかりそうな際どいオフサイドの判定に、顔色を変えずに従った。再生ビデオテープでは、審判のほうに判定ミスがあるように見えたものだ。

そのリネカーさんの協力は、東海骨髄バンクにというよりは日本骨髄バンクへ重点が置かれている。リネカーさんの来日そのものが、Ｊリーグへの参加であるため、東海骨髄バンクの役割がほぼ終わったころだからだ。しかし、来日を決断する背景には、名古屋における骨髄移植の実績があった。

リネカーさんの長男ジョージちゃんは、生後二カ月で急性骨髄性白血病と診断された。ロンドンの病院で自家骨髄移植を受けたものの、リネカーさんがＪリーグでプレーするに当たっての一番の悩みは、ジョージ君の健康管理をどう確保できるかであったにちがいない。名古屋市内の病院の専門医が、わざわざイギリスまで訪問したりした。その結果、ジョージちゃんの健康管理に自信を得て、来日を最終決断したといえる。

「ジョージの状態はとてもよくて、今は二カ月に一回の定期検査だけです。検査を通じて日本の医

療を経験しましたが、設備がとても整っていますし、医療関係者もエキスパートがそろっていますね」

今でこそ落ち着いて語るが、発病を知ったときは大変なショックだったという。

「白血病について何も知りませんでしたから、とても恐ろしい病気に恐怖感さえ覚えて、落ち込んでしまいました。移植後も、ドクターは『予後は良好です』と言ってくれたんですが、ジョージの状態はひどく悪いように見えて、とても動揺しました」

リネカーさんだけでなく、夫人のミッシェルさん（二八）も同じだった。

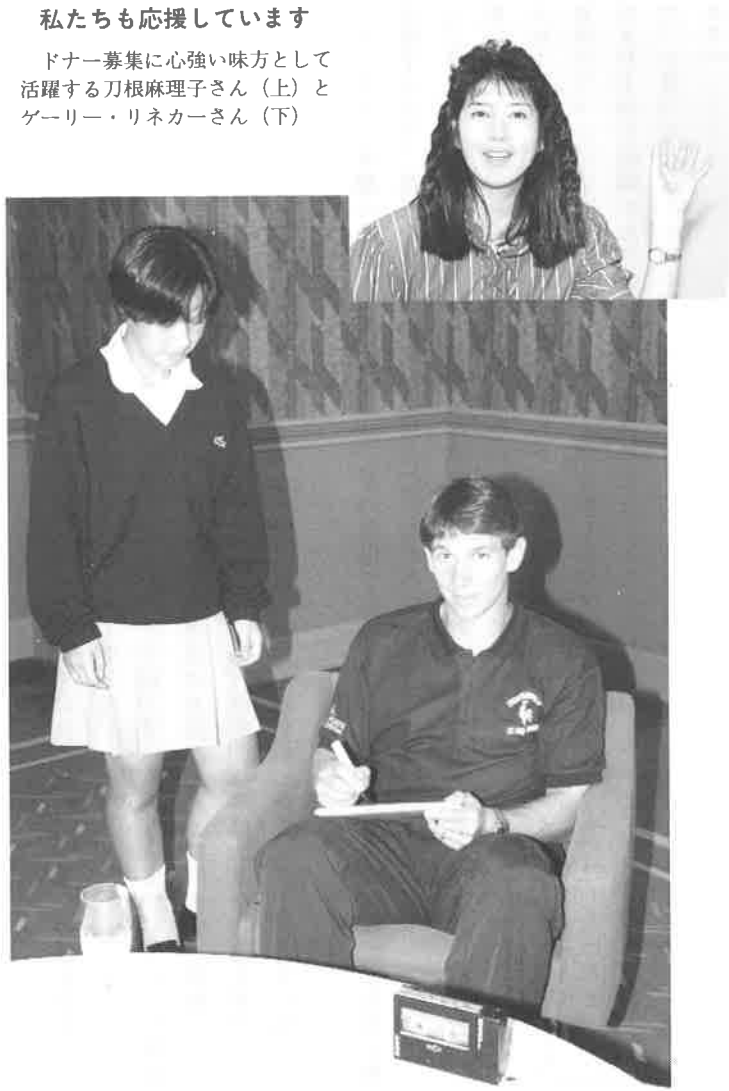
「ジョージが白血病と診断されたとき、彼女は悲しみに暮れていましたし、話しかけるのがつらい時期もあったんです。でも、お互いにいい関係で支え合えたことがよかったと思います。一方が落ち込んでいるときには、片方が助けるという具合に心がけてきたのがよかったですね」

我が子が病気だからといって、すべての人々が骨髄バンク事業に協力するとは限らないのだが、リネカーさんにとっては協力するのが当然だという。

「社会的な視野を持っていれば、だれにもわかるはずだと思うんです。私自身は家族に患者がいますから、ドナーを待つ人たちの気持ちがよくわかりますし、HLAが完全に一致したドナーが見つかって移植できることがとても大事なことなんです。イギリスでも同じ活動をしていましたが、日本はヨーロッパより人種の混合が少ないので、ドナーを見つけやすいんですね。どうすれば他人の命を救えるのか、皆さんとても知りたがっていますから、たとえ小さなことからでも訴えかける必

私たちも応援しています

ドナー募集に心強い味方として活躍する刀根麻理子さん（上）とゲーリー・リネカーさん（下）



要があるというのが、私の考え方です」

日本骨髄バンクに対して、自ら出演しているサッカービデオの売り上げの一部を寄付するなど、すでに応援ぶりを見せているが、今後の協力への考え方を聞いた。

「私はサッカーで有名ですし、ジョージの身に起きたことを知っている人もいます。テレビや新聞などのメディアを通じて訴えかけることが、私にできる最良の方法だと思っています。骨髄バンクを日本だけでなく、世界中の人々に知ってもらいたいですね。医療関係者は大変な功績を挙げていますが、もっとたくさんの人々に、白血病など骨髄移植で治る病気について、多くの人々に知ってもらう必要があります」

ところで、本職のサッカーについては、足の負傷で欠場せざるを得なくなった。九三年九月に再出場するまで、選手としての辛さも味わったにちがいない。

「Jリーグに大きな期待をもってやって来ながら、ほんのわずかゲームをしただけでケガをしてしまい、ファンの皆さんにとても申し訳ないと思っています。骨折を治すには時間がかかりますし、トレーニングもチームメートとは別でしたから、私自身フラストレーションを抱えましたね。でも、日本のファンは素晴らしいので、プレーする楽しみがすごくあるんです。ケガはしたけれど、私にはまだ十分な時間があります。やがて日本を去るときに『彼はよくやった、とてもいい見本になった』と言ってもらえれば本望です。それだけに、日本のサッカーに貢献する責任は重いと思っています」

取材したのは八月上旬のことだったが、グラウンド復帰が間近だからか、あるいは七月二十五日に次男のハリーちゃんが生まれたばかりだからなのか、それより、これが本当のところのようだが、リネカーさんは「常にそうである」ように、笑顔を絶やすことなく質問に誠実に答えてくれた。グラウンドの中だけでなく、外へ出ても、変わりない紳士である。

マスコミの協力

第三章のドナー群像③で紹介したドナーの登録のきっかけは、マスコミ報道によって東海骨髄バンクの存在や骨髄移植の意義を知ったからだ。事務局への問い合わせ電話やはがきが殺到するのは、新聞やテレビなどで紹介された直後であることをみても、マスコミの力の大きさがわかる。募る会の発足からこんにちに至るまで、マスコミ関係者の協力ぶりは、単に「報道する」といった普通のあり方を、ずいぶん超えていた。

募る会発足の記事を書いた中日新聞の川瀬義治さんや、後追いをした読売新聞の千田龍彦さん、バンク設立前後を丹念に追い続けたNHKの加藤行輝さんのことは、第一章でも紹介したが、東海骨髄バンク全体に対する、ジャーナリストとしての評価を聞いてみたい。

川瀬さんは、バンクが発足する少し前の八九年に四日市支局へ転勤になったが、募る会とかかわったおよそ一年間に、中日新聞が掲載した募る会関係の記事は、すべて川瀬さんによるものだ。

「転勤してからも、募る会のニュースのほか、大谷さんからも手紙がきましたから、その後の状況はそこそこ知っていました。第一号の成功発表は四日市に行ってからですが、ドナーがまだ三ケタのころでしょうし、そのなかで見つかったのは患者さんにももちろん幸運でしたし、同時にバンクにも幸運だったと思いましたね。募る会ができたときは、バンクへの展望は持てませんでしたよ。四分六で駄目じゃないかと思っていました」

真っ先に記事化するに当たって、世間の大反響があるだろうと直感した川瀬さんすら、バンク設立には楽観視できなかったのだ。

「こんなにうまくいったのは、ほかの運動に比べて恵まれた条件があったからでしょう。優秀で明るい性格の大谷さんと、立派なお医者さんの集積ですね。大谷さんが生還して、少しずつ余裕を持っていったから、ともすれば暗くなりがちな運動を、性格そのままに明るくしたと思いますよ。お医者さんにしても、皆さんは何も言いませんが、この運動のために相当の自己負担をしているはずです」

だから、東海骨髄バンクがなければ、日本骨髄バンクはできなかったかもしれないという。

「多少でもかかわった者として、東海骨髄バンクはそれくらいの価値があると自負しているんです。確かそのころは、名古屋地区だけで全国の三分の一の骨髄移植を手がけていましたから、名古屋のお医者さんが動かなければどうにもならなかったでしょう。それは逆に、致命的な事故を絶対に起こしてはならないというプレッシャーになったはずです。致命的な事故は運動に決定的なマイナス

になりますから、その点は転勤の際、私なりに皆さんに強く念押ししました。都立病院の事故は本当に残念です。しかも公表されないままでしたから、そこに不信感を持ちますよね。この運動の場合は、ドナーの負担も重いんだということを、もっと率直に公表すべきだったとは思います」

だからこそ、日本骨髄バンクも情報をもっと公開すべきだと主張する。

「東海骨髄バンクについてもそうでしたが、年齢や病気の種類などによって、亡くなった例もあるわけですけれど、そういうデータははっきり出してもらったほうがいいですね。それと、骨髄移植がすべてではないという謙虚さが必要だと思います」

読売新聞の千田さんも、この運動がこれほど発展するとは予測できなかったという。

「PRの方法にしても、ボランティアの集まり方にしても、すごいと感嘆するばかりで、その意味では、こうすべきだと運動に注文をつけることは全くありませんでした。どこかに先に報じられて、こんちくしょうと思ったことはあるんですが、大谷さんの大阪弁のバイタリティーにはかないませんね」

だからだろうか、バンク運動を取材して記事にする際には、新聞記者としての苦労はほとんどなかったという。

「運動の初期のころ、東大の十字猛夫先生が『溺れる子どもを助けるようなものだ』とおっしゃったんです。岐阜支局にいたころには、実際に川に飛び込んで助けようとして亡くなる事故がときどきありましたから、この運動を象徴している的確な言葉だ、という短い記事を書いたことがありま

す。それがずっと頭にありましたから、都立病院の事故については、あまりショックは受けませんでした」

連載に取り組んでから、東海骨髄バンクのドナーに初めて取材したが、それまでは実際のところ、どういうきっかけで登録し、骨髄採取に応じるのか、ドナーの気持ちが今ひとつわかりにくかった。取材の結果、次のような印象を持ったという。

「女性が子どもを産む行為は、家族内の結果ですが、子どもというのはもともと社会にとっての宝物なんです。それなら、宝物である子どもたちが、少しでも助かる可能性のあるボランティアに取り組むのは、男にとって気軽にできるのではないか、ということを感じました」

その取材の折、ドナーに「私も登録します」と約束したが、しばらくたって献血ルームが開設されたときの取材のついでに、成分献血と一緒にドナー登録を済ませ、今は日本骨髄バンクにデータ移管している。

「個人的な話で申し訳ないんですが、結婚して九年目に娘が生まれたんです。東海骨髄バンクができた年です。それまでは、記事を書くことで協力できればいいと考えていたんですが、娘ができてからは単に世の中に警鐘を鳴らすだけでなく、何らかの形で入っていくべきだと、このバンク運動で初めて思いました。ドナー登録すればそれで済むものではないという気持ちですね」

最も記憶に残っているのは、第一号の橋本さんの移植成功を扱った記事だという。

「ドナーと患者さんの手記が発表されましたが、記者会見の席でそれを聞きながらも、どうやって

記事をまとめたらいいか、見当がつかなかったんです」

結局、千田さんは少ない情報を基に、ドナーがどんな人であるか、頭のなかで想像を膨らませた。手記から受けた印象をそのまま記事にしたのだ。

「想像が入りますし、その想像が違うかもしれませんから、ある意味では勝手な記事なんですが、それによってドナーの思いが伝わることのほうが大事だと考えたんです。幸い好評でした。すんなり書けた記事は大して面白くなくて、わけがわからずに頭の中がきりきりしながらまとめた記事のほうが面白いし、書いた本人にも記憶に残るんだと改めて思いました」

NHKの加藤さんは、前に書いたように妹の長男、つまり甥が白血病で八九年に亡くなっている。甥の移植が考えられたときHLAを調べていたので、データをそのまま東海骨髄バンクに登録した。

「私の経験で、何が素晴らしいかって、月に一回の運営委員会なんです。二、三回しかお邪魔せず、しかもこちらは用事が終われば帰りますが、一流のお医者さんや弁護士さんたちが、それこそ口角泡を飛ばすような議論を延々と夜遅くまでつづけるんですね。いつもパンと牛乳だけが置いてあって、それを食べながらですよ」

それだけに、加藤さんは東海骨髄バンクが発展しないはずはないと思っていた。ジャーナリストのひとりとして、共通するテーマがあると直感した言葉を聞いたからかもしれない。

「いつのシンポジウムでしたか、小寺先生が『骨髄バンク運動というのは、日本人の文化度が試さ

れていることなんです』とおっしゃったんですね。いい言葉だと思いました。東海骨髄バンクでは、パンと牛乳が文化をつくったといえるんじゃないでしょうか。それはともかく、私はアナウンサー経験が十八年ですが、仕事を通じて持っているテーマと同じなんです。医療とか教育とかにですね。日本人の閉鎖性を解く鍵に、骨髄バンクがなるんじゃないかと思いました。われわれはどこからきて、どこへ行こうとしているのかという流れは全部一緒で、それなら運動家として加担してもいいじゃないかと考えたんです」

そうした気持ちが、東海骨髄バンク発足直後にテレビの『おはようジャーナル』で一時間を使っての放送につながっていく。

「実はわれわれの仕事というのは送りっぱなしで、反応がなかなかつかめない宿命があるんです。ところが、九一年三月にラジオで二時間を使った骨髄バンクの番組のとき、数人のドナーに集まっていただいたら、『登録のきっかけは、おはようジャーナルです』とおっしゃった方がいて、感激しましたね。もし、あの番組がなければドナーになっただろうかと考えると、何かジーンとくるものがありました。それに、集まったドナーの皆さんが経験を語るときの表情が、実に素晴らしいんです。満足感ともちょっと違って、本当に幸せそうで、これはすごいことなんだと改めて感じました」

苦労したのは、患者の取材だった。

「私たちは映像が必要ですから、当然、顔が出るわけです。そうなると、なかなか出演してくれる患者さんがいません。出てくれる人を探すのもひと苦労でしたが、ようやく了解が得られて収録し

たら、二日後に亡くなった患者さんがいました。発病がドイツだったので、本人にも告知されていたんです。また、ある病院に理解ある先生がいらして、病室の中をロケさせてくれたのはいいんですが、改めて行ってみるとかなりの患者さんが亡くなっていました。そういうことの繰り返しでしたから、ますます『これは急がなくてはいけない』という気持ちになりましたね」

やがて、患者や患者家族が画面に出てくれるようになって、訴える力は急激に増していった。患者やボランティアが中心の番組をつくる場合も、加藤さんは「骨髄バンク・骨髄移植とは」という説明を、短時間でも必ず入れるよう心がけた。

「骨髄バンクも骨髄移植も、その言葉を聞くだけで、あとは説明が不要なくらい浸透していればいいんですが、まだそこまでいっていません。例えば、フロンガスを考えてみると、よくわかるんです。今では『フロンガス』というだけで、余計な説明をしなくてもわかってもらえますが、これが登場したころは、いちいち、どういうものでどういう影響を及ぼすかといった説明が必要でした。骨髄バンクはまだそのレベルになっていませんから、しつこいようでも説明が大事なんです」

加藤さんが名古屋放送局に在職中に撮った映像は、三十分用ビデオテープで百五十本にも達する。

三人のジャーナリストが、かかわりを持ったときに共通していたのは「骨髄移植をめぐる知識はゼロ」ということだった。にもかかわらず「これは、大勢の共感が得られる運動だ」と感じたところが、骨髄バンクにとって恵まれた条件のひとつであった。

ジャーナリストからみた東海骨髄バンクのあり方を、三人に代表して語ってもらったが、バンク

関係の報道に携わってきた記者は、もちろん三人だけではない。延べ人数にすればどれほどになるかわからないくらい、多数の記者が関心を示した。

後続バンクと全国ボランティア

東海骨髄バンクにつづいて、バンク機能を持つグループがふたつ誕生した。九州骨髄バンク（服部絢一理事長）と、北海道骨髄バンク（武井正直理事長）である。ともにドナーと患者登録を受け付け、東海骨髄バンクとの連携もとった。北海道は、東海から骨髄液を輸送してもらった移植を一例手がけただけだが、九州は独自に採取・移植を実施している。

〈九州骨髄バンク〉

九州に福岡骨髄バンク推進連絡会議が発足したのは、八九年五月だった。東海では名古屋骨髄移植グループが、患者登録を始めた時期である。福岡県天神赤十字血液センターに事務局を置いたのが、その後のバンク運営に幸いした。連絡会議はいわばボランティア団体だが、その後、沖縄を含む九州全県に支部が発足したことから、九〇年五月に九州骨髄バンク推進連絡会議（秋吉睦子代表）となった。

ドナー募集と患者登録を開始したのは直前の八九年十月で、患者は山口県からの登録も受け付けた。ドナー登録者数の順調な増加が見込めるようになった九一年四月に、九州骨髄バンクが設立されたのだ。

組織も機能も東海骨髄バンクと変わらない。推進連絡会議が東海の募る会に相当し、九州各県と山口県の骨髄移植グループが患者登録部を受け持ち、コーディネート部は九州地区の医師グループで構成した。ドナー登録管理部を血液センターが担当したのも、東海に学んだ結果だった。

九州骨髄バンクとしての、初めての移植は九一年十一月二十八日である。患者は急性リンパ性白血病の十一歳の男児で、ドナーは三十九歳の女性だ。男児は九二年四月に退院し、今は元気に通学している。

その後、六例を手がけており、九州骨髄バンクでは「七例」を実施例としている。これをもう少し詳しく見てみると、採取・移植を同時に実施したのが五例で、あとは移植のみ一例（骨髄液は東海骨髄バンクからの受け入れ）、採取のみ一例（提供はドイツの患者）である。

ところで、ドイツへの輸送は、ＮＨＫテレビを除いたマスメディアでは、とくに活字媒体に九州地区以外でほとんど報じられなかったため、あまり知られていないのが実に残念だ。

発端はドイツ・デュッセルドルフ市の移植医師からの提供依頼だった。九一年四月のことである。患者は日系二世の少女（一七）で、そのころ欧米の骨髄バンクに登録されていた計五十万人と検索したにもかかわらず、ＨＬＡが一致しないため「日本にならいるかもしれない」と要請があったのだ。バンク発足直後とあって、一時は辞退の空気が支配的だったが、理事長の服部絢一さん（七三）＝金沢大学医学部名誉教授＝が断を下した。

一次検査ですぐ一致する登録者がいた。二次検査のあと、ドイツの病院の都合で三次検査は延び

延びになっていたが、九二年二月にドナーが最終確定した。熊本に住む三十七歳の主婦である。

問題は、採取と移植をどこで実施するかだった。患者は十七歳だから、両親の祖国とはいえ本人には異国である日本で、過酷な治療を実施するのはむずかしいと結論づけられた。そうすると、ドナーにドイツまで行ってもらわなくてはならないが、これもドナーに幼子を含む四人の子どもがいて無理とわかった。結局、日本で採取した骨髄液を、患者が入院しているドイツの病院まで運ぶことになったのだ。

九二年五月二十一日午前三時半に、熊本市内の病院でドナーに麻酔の前処置が始まった。異例ともいえる時間なのは、ドイツに到着する時間から逆算して、航空便の時間に合わせるためである。

五時四十五分に一千ミリリットルの採取が終わり、熊本空港から羽田を経由して成田空港に行き、フランクフルトを経てデュッセルドルフまで運ばれた。空港で手荷物のX線検査台を通るわけにはいかないため、特別の許可をもらって九州骨髄バンク理事の徳永和夫さん（四五）が抱えていった。

採取から二十一時間三十分後に、患者への移植が始まった。六月五日に「生着」のファクスが届き、折からヨーロッパ公演のデュッセルドルフ場所にきていた大相撲の一行のうち、若花田や貴花田ら藤島部屋（いずれも当時）の力士の慰問を受けたが、残念ながら七月二十二日に、多臓器不全で死去した。

海外との提携では、この章で紹介する中堀由希子さんの例が最も有名だが、実は「海外への骨髄提供」は、この九州骨髄バンクの例が最初である。その実現に奔走した服部さんは、こう語ったものだった。

「友人でもあるアメリカのトーマス博士からは、いつも『臓器移植で日本は、もらうだけで外国には提供しないなあ』って皮肉を言われつづけてきました。こんど会ったら、今回の実績を誇りをもって話せますね」

トーマス博士とは、近代骨髄移植を確立し、その功績から九〇年度のノーベル医学・生理学賞を受賞した、骨髄移植界の最高権威である。何度も来日しているから、日本の実情もしっかり把握しているのだ。

ドイツへの骨髄液提供は、単に九州地区だけでなく、新聞なら全国版の社会面トップ記事になっておかしくないニュースである。ところが、九州地区ですら三段程度の扱いで、それ以外の地域では報じられることがほとんどなかった。なぜ、マスコミは軽視したのだろう。

生着確認の報告を受けて、九州骨髄バンクがマスコミ発表したのは、六月十一日だった。バンクから理事長の服部さんと、運搬役を果たした徳永さんが説明に当たった。その席で、こんなやりとりがあったのである。発表資料を基に、服部さんが概略を説明したあと、本筋とは関係のない質問が、ある新聞記者から飛び出した。

「事前の広報で、当日まで関係者への取材はしないでほしいとあるのに、あるマスコミだけを優遇したのは、どういうわけなんでしょう」

まずいことに、その日の朝刊のテレビ番組欄には、NHK総合テレビの『ニュース21』で「特集

〝血液がんの少女を救え〟日本からドイツへ骨髄液輸送の21時間」が放送される予定が載っていた。つまり、新聞記者としては、「事前取材を禁じておきながら、NHKだけに取材させたのはけしからん」というわけだ。記者会見は、その理由をただす記者に対し、バンクが弁明する場となってしまった。

バンクとしては悪意のあるわけがない。せっかくの画期的な事業を報じる場合、事前の映像を撮るところがあっても、それはやむを得ないと考えたはずだ。むしろ、継続的な取材をつづけるマスコミは、時々の出来事に敏感であるのに対し、記者発表にだけ頼っているマスコミは、黙っていても情報が手に入る。できれば、継続的なところにフォローしてほしいと考えるのは人情というものだろう。

この日、衆議院特別委員会でPKO（国連平和維持活動）法案が可決されたため、NHKでは放映を翌日に延期した。マスコミとの対応をどうすればいいかの教訓が残ったといえる。教訓といえば、ドイツへの輸送に関連して、後日、ふたつの事実が判明した。

「私が帰国してから、患者さんのお母さんの礼状を受け取ったんですが、内容に驚きました。ご家族は骨髄移植をすれば、必ず治ると信じ込んでいたそうです。それに、骨髄移植の実際について説明を受けたのが、移植の数日前だったというんです。病院も医療スタッフも日本よりレベルが高いといわれていましたが、まさかインフォームド・コンセントが不十分だったとは、考えてもいませんでした。患者さんが亡くなられただけに、とても後味の悪い思いをしました」

徳永さんが、無念といった表情で語る。不愉快な経験がもうひとつあった。相手の病院からの費用の支払いがとても遅れたことである。患者登録料とコーディネート料、三次検査用検体輸送料の計約二十万円はすぐ支払われたのに、ドナーの入院費用・保険掛金、骨髄液運搬料、その他諸雑費の計百二万円は、なぜか振り込まれてこない。

「採取病院からの請求が遅れていたこともあって、こちらからドイツへ請求したのも七月になったんですが、それにしても何度催促しても支払われず年を越してしまいました」

業を煮やした九州骨髄バンクは九三年三月、理事長の服部さん名義で〝最後通牒〟を出し、四月までに支払いがなければ国際登録機関と交渉するつもりであると告げた。ようやく振り込まれたのは、骨髄移植からほぼ一年後の九三年五月だった。今後、日本骨髄バンクが海外へ提供する事例が出てくると思われるが、これは大きな教訓になるだろう。

「われわれの反省としては、概算額は伝えておいたものの、事前に請求していなかったことなんです。これから提供することがあれば、全米骨髄バンクのようにあらかじめ一定額を振り込んでもらい、必要経費に充てていく方式をとるのがいいでしょうね」

ところで、九州骨髄バンクは九二年六月末でドナー・患者登録の受け付けを締め切った。データを日本骨髄バンクへ移管するためだ。最終的には、ドナーは九州全域と山口県を中心に千百五十七人（HLAのA・B座検査済み。このほかに未検査が六百五十五人）で、患者登録は百一人だった。コーディネーション状況をみると、A・B座一致が五十一組、DR座一致が十四組、MLC一致・

ドナー同意が九組である。

〈北海道骨髄バンク〉

北海道骨髄バンク推進連絡協議会（鵜田孝子代表）が発足したのは八九年十一月で、九〇年十月には道内各層から理事を選んでの北海道骨髄バンク推進協会（武井正直理事長）に衣替えした。十二月から開始したドナー・患者登録は九二年六月で締め切ったが、ドナー（A・B座検査済み）は九百三十七人、患者は三十人だった。独自の採取・移植はなかったが、ドナー募集の努力は、日本骨髄バンクにも引き継がれている。

したがって、日本骨髄バンクの移植以前に、日本で実施された非血縁者間移植（骨髄の採取と移植）は、公式に確認されているものが六十四例ということになる。細かくみていくと、東海骨髄バンクが五十五例、九州骨髄バンクが五例、東海骨髄バンク以前が四例（名古屋大学病院と東海大学病院が各二例）である。このほかに、ドイツの患者への提供（九州骨髄バンク）と、アメリカのドナーからの受け入れ（名古屋の病院）が一例ずつある。

〈ボランティア団体の全国組織〉

全国骨髄バンク推進連絡協議会は、ボランティア団体の集合体ながら、日本骨髄バンク設立へ大きな力を発揮してきた。また設立後も、問題点の解決のためにさまざまな運動を展開している。東海骨髄バンクの渉外広報を担当する名古屋骨髄献血希望者を募る会も加盟しており、少しばかり内部をのぞいてみよう。

そもそもの発端は、八七年十二月に発足した「全国骨髄バンクの早期実現を進める会」だ。日本におけるバンク運動創始者のひとり、橋本明子さんが主唱し、東京の患者家族が中心になってつくりあげたが、運動初期には資金がほとんどない。移植前の入院中であった大谷貴子さんに代わって、母の巻枝さんが託した五十万円が、立ち上がり資金のすべてだった。

翌年二月に初の民間シンポジウムが東京で開かれてから、運動は全国に広がっていく。名古屋骨髄献血希望者を募る会がドナー募集を開始してから、大阪、東京でも取り組みが始まり、同時に公的バンクの設立を求めるための署名集めも全国展開された。

八九年三月に「全国骨髄バンク推進連絡協議会」と現在の名称になったが、運営の中心が橋本さんであることに変わりはなかった。東海骨髄バンクが発足するのは、この年の十月だが、それとは関係ないものの、同じ時期に全国協議会は最大の転機を迎えた。橋本さんが「解散」を提案したからだ。

全国協議会は、翌九〇年六月に陣容を建て直して再発足するが、名称に変化はなかった。運営副委員長に内定していた橋本さんは、全国のボランティア仲間に「決別の辞」を送って身を引いた。

新全国協は会長不在のまま、運営委員長に神奈川の宮戸征美さん（五五）を選出した。運営委員長は九三年五月、渡辺孝一さん（四三）に交代したが、大谷さんは一貫して副委員長を務めている。名古屋の募る会からは、磯和夫さん（九一年十二月に四十三歳で死去）が運営委員として活躍した。

全国協議会の詳しい活動は割愛するが、「真木ちゃん基金」には触れておきたい。基金設立の記事

によって、ドナー登録をした人がいるからでもある。

基金の名称となっている国本真木ちゃんは、大阪府茨木市立小学校六年生だった八七年十一月に急性骨髄性白血病と診断された。その日は父の初七日だった。父の秀和さんは骨髄細胞形成不全症のため、三十七歳で亡くなったのだ。

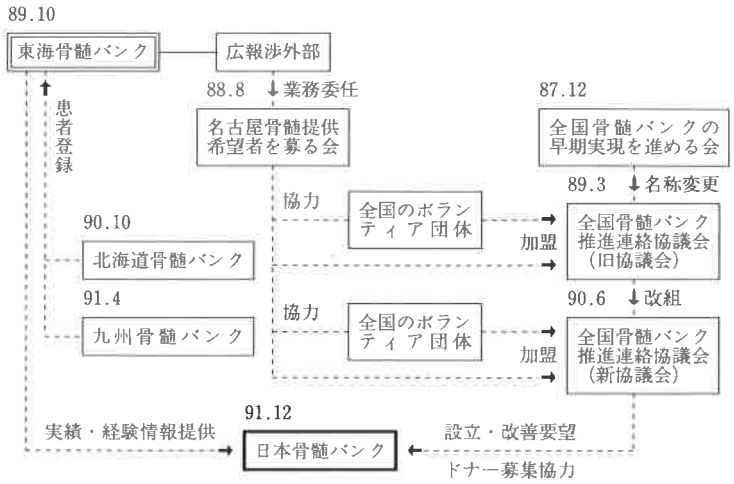
母の由利子さん（四二）は、真木ちゃんにだけは骨髄移植を受けさせたいと考えたが、そのころは骨髄バンクもなく、患者と患者家族の多くは独自にドナーを探すしか方法がなかった。由利子さんも初めはそうしたが、百人あまりに依頼したところで、バンクをつくるほうが早道だと教えられ、個人としてのドナー集めをやめた。

ただ、真木ちゃんのためにＨＬＡを調べてくれた人の中に、秀和さんと同じ型（Ａ・Ｂ座）の人がいたことで、由利子さんはホゾをかむ思いをしたという。それもあって、由利子さんは国会に提出する「百万人署名」が始まってからは、二カ月で三万六千人分を集める奮闘ぶりを見せた。

真木ちゃんは化学療法によって、二回の寛解期を得たものの、十四歳を迎えた誕生日の翌日の八九年五月二十四日、亡くなった。一週間前には、検索を依頼していたイギリスのアンソニー・ノーラン・リサーチ・センターから、ＨＬＡのＡ・Ｂ座がマッチするドナーが見つかったという知らせが届いていたのだが……。

真木ちゃん名義の預金通帳には、七十六万三千円が預けられていたが、由利子さんが百万円にして、これを基礎に全国から骨髄バンク運動基金を募ることにした。国本さんや大谷さん、橋本明子

〈図３〉主な骨髄バンク運動の流れ



さんらが記者会見で趣旨を発表し、八九年九月の新聞各紙で報じられた。その際に「真木ちゃん基金」と名づけられ、半年で約一千七百万円が、全国から寄せられた。

その基金は、全国協議会が新たな装いで再出発したときに、国本さんから託されたのである。国本さんは九一年七月に長野・菅平高原でペンション経営を始め、九二年八月に全国協議会が初めてのセミナーを開くに当たって、その会場に利用した。

九三年になって発行された小冊子の『道程～骨髄提供者一〇〇人の声』にも触れておこう。北海道から沖縄までの百八人の声をまとめたもので、ドナー登録に向けた苦情やアイデアなどが網羅されている。特徴的なのは、日本赤十字社に対する不満が「これでもか」といった調子でつづられている点である。

各地の声を集める時期には、ドナー登録希望者が怒りを感じるほど、とにかく登録窓口が「冷たかった」あらわれでもあるだろう。九三年になってから、日赤の対応が変化してきたのは、この小冊子に負うところが大きいようだ。一万部を発行し、全国会議員にも配布された。

さて、二年間不在のままだった会長には、海部俊樹元首相夫人の海部幸世さんが、九二年五月の総会で選出された。幸世さんが会長職を引き受けたのは、大谷さんら東海骨髄バンク関係者の訪問によって骨髄バンクの意義を聞かされたからだ。

現職のファースト・レディーであったころ、ヒューストンサミット（九〇年）に出席した幸世さんは、当時のブッシュ大統領夫人のバーバラさんから、日本の骨髄バンク事情を聞かれて困ってしまった。ほとんど情報らしいものを持っていなかったのだ。バーバラ夫人はブッシュ氏が政治家になる以前、幼子を白血病で亡くしており、サミット後に骨髄バンクへのドナー登録を訴えるテレビに出演し、それがきっかけでアメリカのドナープールが急激に拡大した実績を持っている。

帰国してから、東海骨髄バンクの日比野理事長をはじめ森島さん、小寺さん、串田さん、大谷さんの訪問を受けたものだから、詳しい状況を知るとともに、たちまち協力姿勢を示したのである。

海を越えた提携

日本の骨髄バンク運動の歴史はそう長くはないものの、密度は非常に濃い。運動の中心は女性たちであったが、その中にあって磯和夫さんは、強烈な存在感を示してきた。自ら慢性骨髄性白血病

の患者でありながら、東海骨髄バンクで設立以来の運営委員であるとともに、新たな組織づくりを終えて再発足した全国骨髄バンク推進連絡協議会の企画担当運営委員としても、活動をつづけてきたのだ。

磯さんの足跡をたどることには異論がないはずだが、磯さんにつづいて紹介するふたりの女性は、東海骨髄バンクと直接の関係はない。だが、磯さんが残した業績の証として触れることにしたい。

磯さんは、大手自動車メーカーの社員で、会社がアメリカに設立する合弁会社の準備要員として、家族ともどもイリノイ州で生活していた。年に一回の健康診断で白血球数の増加を指摘され、詳しい検査を二回やったところで、告知を受けた。八九年二月である。

「お医者さんから『この病気は骨髄移植しか治癒の見込みがないので、兄弟姉妹のＨＬＡを調べなさい』と言われ、とにかく旅行バッグだけの姿で帰国しました。でも、主人の姉と兄のＨＬＡとは一致しなかったんです」

妻の幸子さん（四二）が当時を思い起こす。

滞米中から、日本で治療を受ける際の病院探しをしていた磯さんは、最終的に名古屋大学病院を選んだ。主治医が森島泰雄さんだったことが、磯さんがバンク運動にかかわる大きな要素となった。

「先生は『無理には勧めませんが』とおっしゃったんですが、主人は『自分には間に合わないかもしれないけれど、同じ病気を抱える患者のためになるなら』と、運動参加に強い決意を固めました」

名古屋骨髄移植グループが患者登録受け付けを公表する直前だ。大谷さんらからバンク運動の現

況を聞いた磯さんは、募る会のボランティアとして活動していくことを決めた。会社でも自らの病気を公表し、同僚らにバンク設立運動への協力を訴えた。

自覚症状がないから、平日は会社の仕事をこなし、土曜と日曜にバンク運動を進めるという生活が始まった。テニスを楽しむ余裕も、このころにはあった。

東海骨髄バンクが発足して運営委員に選ばれたが、磯さんの活躍の場はむしろボランティアグループのほうである。とくに、全国協議会が橋本明子さんの「解散提案」をめぐって、最大の危機に立たされた時期だっただけに、もの静かながら存在感のある磯さんは、だれにも頼られた。

〝磯メモ〟として有名な磯さんのノートには、新たな組織づくりを模索する準備会の模様も記録されているが、「みんな、難しく考えすぎていないか?」という書き込みも見られる。数少ない患者の委員として、もっと素直に考えてもいいのではないか、という思いがあったにちがいない。

九〇年の前半は、新協議会の立ち上げとその後のフォロー、そして東海骨髄バンクの活動がつづいた。〝磯メモ〟には、骨髄バンク関係の記述と、仕事の覚え書きが混在しているが、かなりの忙しさだったのではないだろうか。

「そうした活動に参加したことで、主人の気持ちが屈しなかったのだと思います。病気そのものは告知されてからずっと辛かったと思うんですが、常に前向きな姿勢を崩さないできました」

幸子さんは、むしろ自分のほうが弱気になりかけたのではないかという。そうした、忙しいながらも充実した日常が変化したのは、九一年六月だった。慢性骨髄性白血病に起こる急性転化が、磯

さんをも襲ったのだ。六月四日に名古屋第一赤十字病院へ入院した。月に数回認められた外泊のほかは、ひたすら病室で化学療法を受けていた。この間、病院の会議室を利用して東海骨髄バンクの運営委員会が開かれた。全国協議会の運営委員会まで、病院会議室を利用した。磯さんも出席できるようにとの配慮である。

十月十日にいったん退院したが、さすがに仕事をするのは無理で、自宅療養を続けるようになった。白血球数も割合落ち着いてきたことから、それまで自分のドナー探しをしなかった磯さんを見かねた大谷さんが、渡米した折に磯さんのHLAデータを持って、全米骨髄バンク（NMDP）にドナーがいないものかと検索してもらったのだ。

そうしたら、HLAのA・B座が一致している登録者が八人いることがわかった。その後の検索には五千ドルが必要で、十一月十三日には振り込みを済ませた。このあとの諸手続きが、のちに生かされることになるのだ。磯さんは、よほどの専門事項でないかぎり、すべて自分で手がけた。

NMDPに送る磯さんの血液は十二月三日朝、病院で採取し、あらかじめ調べておいたルートに従って、成田空港まで磯さん自身が運んだ。税関手続きを済ませた血液は、予定どおりNMDPに届き、あとはDR検査の結果を待つだけだった……。

結果が届けられる前、磯さんは再入院した。血液を送り終えて成田から帰宅したが、夕食がのどをとおらず、六日間の身体の不調を我慢した末、ついに耐えられなくなって十日早朝、救急車で病院に運ばれたのだ。

亡くなった二十七日は、偶然にも四十三歳の誕生日である。葬儀がおこなわれた日、名古屋地方は曇り空だったが、磯さんの遺体が出棺される瞬間、名古屋駅近くの葬祭センター一帯は、吹雪もようとなって参列者の喪服を真っ白にした。

「告知されて以来、私のほうが何度泣いたかしれないのに、主人は泣いたり暗くなったり取り乱したりということが全くありませんでした。よくこんなに冷静でいられるものだと思ったものです。故郷の九州では、主人のためにドナー集めをしようかと言ってくださる方々もいらっしゃったんですが、そういう現実を見ていて、移植を受けられる人と受けられない人とのチャンスの違いは、こういうものなのかと思いました。亡くなる一週間前から熱が出て、それからすぐ駄目になったので、白血病ってこういうふうになるのかと、主人で初めてわかりました」

幸子さんは、募る会のボランティアを始めた。また、磯さん一家は「磯ファミリー」といわれるほどで、父や姉が九州骨髄バンクやボランティア団体での活動を、その後もつづけている。

吹雪もようの葬儀の情景を名鉄電車の車窓から偶然に見かけたのが、中堀由希子さんである。中堀さんは磯さんの死去を知らされないまま、外泊許可を得て愛知県岡崎市の自宅へ帰る途中だった。中堀さんは、関係者に親しまれている名前のほうを書くことにする。

由希子さんと磯さんは〝闘病仲間〟以上のつながりがある。磯さんが切り開いたNMDPとのルートを活用して、アメリカのドナーから骨髄液の提供を受けて移植に臨んだし、骨髄移植推進財団

の初のキャンペーン・ガールとなって、啓発ビデオに出演したのは磯さんの勧めによるものだった。残念ながら移植二カ月後の九三年一月に二十一歳で亡くなってしまったが、ドナー募集への貢献は大きい。

由希子さんの発病は、高校を卒業して一年間の留学生活を送っていたニュージーランドであった。九〇年秋のことだ。八月に両親と妹が現地を訪れ、由希子さんともどもオーストラリア旅行など八日間のツアーを楽しんだときには、前兆は全くなかった。

だが、由希子さんは五月ごろから不調を自覚していた。体がだるく、すぐに疲れて眠くなるのだ。ホームステイの一家に紹介されて行った開業医では風邪と言われ、本人もたまにひく風邪はたちが悪いくらいにしか思っていなかった。薬を飲んでも熱はいっこうに下がらない。そのうち歩くのも億劫になり、夜には眠れないほどの耳鳴りに襲われた。

慢性骨髄性白血病と診断が下されたのは十月十八日、四カ所目に訪れたクライストチャーチ市民病院でだった。一マイクロリットル当たりの白血球数は、普通だと数千なのだが、由希子さんは五十万近くもあった。白血病細胞に侵されて正常な白血球がほとんどつくられず、血液は文字どおり白く見えたという。即日入院した。

父の徳幸さん（四六）と知香子さん（四五）は現地の日本人スタッフから、骨髄移植を前提にした病院を探してほしいと要請され、名古屋第一赤十字病院を選んだ。両親がニュージーランドへ迎えに行ったのは三十日だった。ところが、およそ一週間の治療で由希子さんは、奇跡的な回復を示

していた。なんと両親を空港にまで迎えに出てきたのである。

十一月三日に帰国し、五日に入院した。由希子さんの姿を見て、看護婦は仰天したらしい。ミニスカートに黒タイツ姿はまだしも、旅行用スーツケースの台車の音を響かせながらやってきたのだ。初めのうちTシャツとGパン姿で過ごしていたため、入院患者の家族からはドナーに間違われた。

最初の入院は二カ月あまりで、九一年一月末に退院した。一、二週間に一回の通院のほかは、自宅でぶらぶら過ごしていた。高校時代の友人たちは大学生や専門学校生になっていたから、友達との外出もたまにしかない。夏が過ぎるころ調子が悪くなった。血小板の数値が落ちたため九月に再入院となる。二度目の入院の初期はずいぶん荒れたという。

「きょうだい喧嘩もすれば、私たちの言うことにもあまり耳を貸そうとしませんでした。自分で駄目だと思い込んでいたからではないでしょうか」

徳幸さんが思い起こす。ある日は、なんと独身男性の患者相手に病院の談話室で立ち回りを演じた末、荷物をまとめてしまった。帰宅する車の中で聞いたら、いきなり相手にスリッパでひっぱたかれたという。由希子さんが我慢できなかったのは、髪の毛を引っ張られたことだ。それでなくても髪の毛が抜けるのを気にしているのに、というわけだ。

そんな由希子さんが変化しはじめたのは、十二月になってからだった。大谷さんや磯さんとの出会い、そして恋人の出現が、わがままな子だと思ってきた知香子さんをもびっくりさせる由希子さんに変身していくのである。

磯さんが同じ病棟に入院してきたとき、ちょうど大谷さんの著書『霧の中の生命』が出版された直後で、磯さんが病院内で本の〝行商〟をしているころだ。磯さんを通じて大谷さんと知り合えた。

磯さんは由希子さんに、骨髄移植推進財団の啓発ビデオへの出演を持ちかけた。由希子さん自身、東海骨髄バンクに患者登録をしながら、いまだにドナーが見つからない身として、ドナー募集に役立つならと応じることにした。啓発ビデオが出回るのは九二年になってからだが、この年の成人式直前には退院できた。

まだ入院中だった十二月に、専門学校生の辻井重吉さん（二二）があらわれた。何回か会ううち由希子さんには、病人としてではなく普通の若者としての立場を認めてくれる辻井さんが、次第に好ましい男性になっていく。

バンク運動とかかわるきっかけは、啓発ビデオへの出演だが、九二年二月に東京で開かれた「骨髄バンク事業開始記念シンポジウム」に、大谷さんの誘いで知香子さんと一緒に出席してから、骨髄バンク事業の重要性を身にしみて知った。

四月から活発な運動を開始する。二十五日の岐阜シンポジウムでは「骨髄提供者を待つ二十歳の女性の熱き思い」を語った。不特定多数の人々の前で体験を披露するのは初めてのことだ。ニュージーランドでの告知をはじめ、由希子さんは心境を述べた。

その二日前、特定多数の人々の前で、ドナー登録の訴えかけをしている。陸上自衛隊郡山駐屯地でのことだ。これが、その後の自衛隊巡りの始まりとなる。六月十七日に千葉県木更津の第一ヘリ

コプター団、七月十六日に大分県の湯布院、玖珠、別府の三駐屯地、九月十七日に神奈川県の防衛大学校とつづくのである。

一方、九二年になって由希子さんのドナー探しが、関係者のあいだで必死に進められていた。国内ではなかなか見つからず、主治医の小寺良尚さんが、全米骨髄バンク（ＮＭＤＰ）にドナー検索を文書で依頼したのは一月だった。三月の手紙で、ＨＬＡのＡ・ＢとＤＲまで一致したドナー候補者がいた。その後の検査に進むために必要な経費を振り込んでから、由希子さんと家族の検体をアメリカに送った。送るためのルートは、磯さんが開いてくれていた。ＭＬＣ検査で適合したという連絡があったのは七月二十七日である。そうなると移植病院を決めなければならない。

「磯さんのときは時間がないので、適合ドナーがいれば、磯さん自身をアメリカに送ることを考えました。しかし、中堀さんの場合は、ご家族の意向もあって私たちの病院で移植をすることにしたんです」

ところが、九月になって、由希子さんの右側の首筋に腫瘍ができた。二年近くつづいていた第二慢性期から急性転化があらわれたのだ。二十四日に入院した。その前に由希子さんは、辻井さんと数回の旅行に出かけている。一泊の神戸旅行では、ウエディングドレスを着て写真を撮ってくれるところで、純白のドレスをまとった。

入院直前、辻井さんに「頑張らなくちゃね」といって、過酷な治療に耐える決意を見せた。由希子さんにとって辻井さんは、だれよりも頼りになる恋人になっていた。

ＮＭＤＰからの骨髄液は、十一月十三日に届けられた。アメリカから骨髄液を受け入れるのは、何しろ日本では初めてだ。東海骨髄バンク事務局の小西朝子さんらが万全の対応を整えた。情報管理に最も気をつかったという。

骨髄液を携えたＮＭＤＰのコーディネーターが、成田空港経由で名古屋空港に着いたのは午後六時で、そのまま救急車で病院に到着したのが六時半だった。そのころ病院の周りは、テレビ各局の中継車が取り囲むなど騒然とした雰囲気に包まれていた。

午後七時から無菌室で八百ミリリットルの骨髄液が、静かに由希子さんの右腕から体内に入っていったが、あたかも飢えた乳児がミルクを見詰めるような視線を、血液バッグに投げかけている姿が、代表取材のカメラマンによって撮影され、翌日の新聞を飾った。

記事が掲載された十四日が二十一歳の誕生日とあって、願ってもないバースデー・プレゼントになったわけだが、ドナーからは緑色のペンダントも贈られた。

十二月四日には無菌室を出たが、合併症はひどく、二十三日に皮膚炎や下痢が再発し、肝機能は低下する一方だった。

九三年一月十一日に意識がなくなった。直前に幻覚にとらわれていたが、眠りに入ってからは覚めることなく、翌十二日午前三時四十分、二十一歳の生涯を閉じた。死因はＧＶＨＤに伴う肝不全だった。

由希子さんは、第二慢性期を維持するための化学療法剤に移植前治療が加わって、肝臓にかなり

のダメージを受けていた。急性GVHDは0度からⅣ度までであって、Ⅲ度以上の重症は生命にかかわる場合が多いが、由希子さんは最重症のⅣ度で、主治医の小寺さんもこれまでに数例しか経験したことがないという。

十四日に岡崎市内の葬祭センターで営まれた告別式では、出棺に際して辻井さんが由希子さんの写真を持った。両親の配慮だが、それほどまでに辻井さんとの仲は深まっていた。

辻井さんは大分県の出身である。放射線技師を養成する専門学校で勉強するため愛知県に来たのだが、九三年三月に卒業して四月から名古屋市内の病院に勤務を始めた。由希子さんが入院する前に約束していた進路である。

由希子さんのドナーが決定する直前の九二年七月、由希子さんと大谷さんが訪問したのが、三重大学病院で骨髄移植を控えていた韓国人女性の金銀淑さん（キム・ウンスク＝三〇）だった。金さんは観光ビザで来日していたから、〝不法滞在〟の身で七月十五日に骨髄移植に臨んだ。そのため、移植の話題を含めてマスコミにも大きく取り上げられた。

金さんが慢性骨髄性白血病と診断されたのは八六年春である。公立の看護専門大学を卒業し、カトリック病院で看護婦として働き始めた矢先に、病院の健康診断で判明したのだ。試用期間中だったため採用が取り消され、大学病院での通院治療が始まった。

看護学校在学中に知り合った張在赫さん（チャン・チェヒュッ＝三〇）と結婚したのは八九年五

月だ。日本で骨髄移植が盛んにおこなわれていることを雑誌で知った金さんと、大学中退の身では移植費用を稼ぐほどの職に就けないと考えた張さんは、ふたりで日本への渡航を決めた。日本でなら蓄えも早くできるだろうし、移植を受けられるかもしれない……。

挙式は済ませたものの、婚姻届を出すゆとりもないまま、まず張さんが慌ただしく来日した。張さんの兄弟が、すでに三重県内で働いていたのだ。三カ月後に金さんもやってきた。だが、予想したようには手術費用はたまらなかった。給料の半分は生活費に必要で、残金も多くが渡航費用の返済に消えていった。そのため、金さんも働き始めて、やっと蓄えができると喜んだのもつかの間、金さんは職場で倒れてしまった。運悪く、韓国で大量に買い求めておいた薬を使いきっていた。

自宅近くの病院で三重大学病院を紹介された。主治医となった第二内科の影山慎一助手（東海骨髄バンク運営委員）は、移植を盛んに勧めたが、夫妻はおいそれと応じるわけにはいかない。観光ビザの滞在期限はとっくに切れていた。不法滞在がわかれば送還されてしまう。しかも、健康保険が適用されないから多額の自己負担を覚悟しなければならないのに、蓄えはまだ少なかった。

慢性骨髄性白血病は、発病から三年ないし五年の慢性期こそ、外見上は普通の人と全く変わらないが、いつか訪れる急性転化を起こすと、薬ではとうてい抑えられない。移植しても成功率は下がる。九一年春には、診断から丸五年が過ぎた。

影山さんは、いつ移植が可能になってもいいように、とりあえずドナーだけでも確保することにした。韓国にいる金さんの兄弟姉妹七人のHLAを調べたところ、すぐ上の姉と一致していた。そ

す」

移植からほぼ一年たった九三年七月、原因不明の高熱と全身の痛みが出た。「慢性GVHDか？」と心配されたが、二週間近くの入院を経て元どおりになった。ちょうど、半年の滞在延期を関係者らが決めたこともあり、金さんは九四年春まで日本に滞在する。

移植を受けたころは、帰国したら看護婦として働きたいと思っていたが、最近は通訳になりたいと考えている。生活費を確保したいからだ。やがて「韓国の大谷貴子」と言われるような、骨髄バンク活動を展開する日がくるにちがいない。

ドナー群像 ④

骨髄提供の経験は、まさに一生に一度あるかないかだ。東海骨髄バンクの登録者（HLAのA・B座検査済み）三千六十人のうち、実際にドナーとなったのは五十五人である。ほぼ五十五人にひとりという勘定になるが、この数字は「意外と多い」という印象だ。

実際の体験を公表することによって、登録者の増加に寄与したいと考え、バンク運動に乗り出すドナーが出てくるのも、自然の流れである。

そうした七人を紹介したあと、立場や動機などがほかの人たちに比べて、いささかユニークなドナー七人に登場願って、ドナー群像を締めくくりたい。

＊

横浜市鶴見区の動物病院助手池田あゆみさん（二八）は、バンク関係者のあいだでは「あゆみちゃん」と親しんで呼ばれるほど、ドナー体験を各地のシンポジウムで発表してきた。

もともとのきっかけは高校生のころに始めた献血だった。前々から、何かできるボランティアはないものかと考えていた。

「ただ、私にはお金も時間もありませんから、骨髄液のドナーならぴったりだと思ったんです。心

を決めたのは、NHKで『驚異の小宇宙・人体』の特集を見て、HLAが適合すれば移植という治療法があって、患者さんが助かることを確実に知ってからですね」

池田さんのHLAは一般的な型のようで、登録して二カ月あまりのうちに二次、三次検査と進んだ。提供まで半年たらずというスピードだった。ところが、最終同意の段階で思わぬ混乱に直面した。

「母の親戚筋から『危ないからやめたほうがいい』という意見があって、母も印鑑を持参しながら最後には押せる状態じゃあなくなったんです」

何が何でも提供したいと思い込んでいる池田さんは、その場で泣き騒いでしまった。立ち会った弁護士がいったん手続きの中断を提案した。そうなってはまた出直しになると考えた池田さんは、改めて母を説得した。最後に言ったひとことがきいたのだ。

「私たちが逆の立場で、私が病気だとしたら、お母さんは必死になって提供者を探すでしょう。それを考えるから、せっかく適合者の見つかった患者さんを私は助けてあげたい」

好奇心旺盛な性格を丸出しにして、池田さんは自らの体験を詳細なメモにとった。ボランティアグループの公的骨髄バンクを支援する東京の会の会員になって、会報に体験記を寄せたりした。各地で開かれるシンポジウムでも積極的に実名で発言してきた。

「自分の身体には責任がありますから、もらう薬を含めて入院中の出来事はすべて記録しました。体験発表にしても、仮名で説明をしてもなかなか信じてもらえないところがあると思ったからです。

病院名や具体的な日程さえ言わなければ、本名できちんと事実を伝えたほうがいいと思いますね」

九一年二月を皮切りに、九二年までにおよそ三十カ所のシンポジウムに招かれた。その折には、こういった話をすることにしている。

「私は、患者さんに骨髄液を提供した代わりに、患者さんから『幸せのタネ』をもらったと思うんです。タネをくださった患者さんはもとより、届けてくださったバンクのスタッフやお医者さん、弁護士さん、病院のスタッフにとても感謝しています」

ただ、これまでに一カ所だけ参加できなかったことに、いまだに申し訳ない気持ちがいっぱいだという。九一年九月に福岡県飯塚市で開かれたシンポジウムに出席するため、羽田に向かったのだが、折悪しく横浜からの高速道路が渋滞して、とうとう飛行機の出発に間に合わなかった。それを逃すと次の便に乗っても、シンポジウムは終わってしまう。

「そのときも、申し訳ないという気持ちでいっぱいだったんですが、後になって取り返しのつかない失敗だと気が滅入りました」

というのも、飯塚市は東海バンクの運営委員で九一年十二月に亡くなった磯和夫さんの故郷で、磯さんからもよろしく、と伝えられていたからだ。

「もし飛行機に間に合っていて、シンポジウムで私の話によって登録してくれていれば、その人が磯さんと適合していたかもしれないと思うと、いたたまれませんでしたね」

その思いがあるからこそ、今後もバンク運動には積極的に乗り出していく。また、ドナー経験者

で、体験発表などに協力できる有志には、ぜひ運動に参加してほしいという。

＊

静岡県清水市の会社員三田村真さん（二七）も、池田さんと同じように各地のシンポジウムでドナー体験を語りつづけている。スタートが九二年二月の骨髄バンク事業開始記念シンポだから、池田さんほどの回数ではないが、それでも九二年だけで十回を超す。

三田村さんのドナー登録のきっかけは、埼玉県立高校生時代に親友を急性リンパ性白血病で亡くした経験が基礎となっている。

「三年生になってすぐでした。彼のために成分献血が校内で呼びかけられたんですが、血液型の違うぼくは、なんの役にも立てずにすごく悔しい思いをしました。それがずっと気にかかっていて、頭の中にしこりとして残っていたんです。なんとか血液内科をやりたいと考えました」

医学部を目指して二年間浪人生活を送ったものの、超難関であきらめざるを得なかった。代わりに進んだのが静岡大学理学部で、卒業後は医療機器メーカーに就職し、人工心肺システムの開発に携わっている。

バンク運動とのかかわりは、登録する直前に読んだ全国紙の一面コラムに触発され、静岡県内での広がりを模索しはじめてからだ。県内の移植医や日赤を訪れては勉強を重ねていった。

その努力は九二年四月に、静岡県・骨髄バンクを推進する会となって花開き、三田村さんは副会長となった。推進する会が行政に働きかけた成果も出て、県が独自に登録問い合わせ用のフリーダ

イヤルを設置した。また、九二年十二月の骨髄バンク強化月間には、県の職員がドナー登録を呼びかけるリーフレットを主要駅頭で配布するまでになった。

運動を進める途中でドナーとなったのだが、思いは複雑だった。

「人の命を助けることのできる可能性が、検査のつど自分のものになっていく実感を味わいましたが、本心としては高校時代の友人の発病がもっとあとで、彼に提供できたらという気持ちもありました。でも、それは無理な話ですし、悔しさをドナーになれたという形で残せたことで、彼も喜んでくれたはずです」

九三年三月六日に挙式した。妻の章子さん（二九）＝旧姓・信原＝との出会いはバンク運動である。

章子さんは看護婦で、倉敷市内の病院に勤務していたころから血液疾患の、とくに小児患者をみたくて、九一年春に埼玉県立小児医療センターへ転勤した。地元のボランティアグループの埼玉骨髄バンク推進連絡会に入って活動していたが、倉敷時代に携わっていた岡山県のボランティアグループの動向も気にかかっていた。

九二年四月、たまたま岡山のグループからシンポジウムにふたりとも招かれた。三田村さんはドナー体験者として、章子さんは司会役としてだったが、往復の新幹線が一緒だったことが、ふたりを結びつける大きなきっかけになった。ほぼ一カ月後に三田村さんがプロポーズしたという。

章子さんは埼玉では期待されたスタッフだっただけに、埼玉のメンバーからは冗談混じりに、あ

るいは本音半分に「静岡に奪っていくのか」と皮肉られたそうだ。勤務先も静岡県立こども病院に替わったから、今後は静岡で大きな力を発揮するにちがいない。

三田村さんは、かなり先の方向を見すえている。

「ぼく自身の生活の中で、ドナー経験ほど心から感動できて納得したものはありません。同時に、バンク運動は医療体制を充実させるためだけとは考えていないんです。日本人全体の意識を向上させるためだと思うんです。根本にあるのは、命への思いと優しさなんです。現実に多くの患者さんが苦しんでいて、懸命に頑張っているんですから、それをまず知ってほしいんです。登録をきっかけに自分自身の命を考えてほしいと思います。その意味では、バンク運動をつづけていくことは、文化運動の一端を担わせてもらっているという自覚を持っているつもりです」

＊

岐阜県大垣市の地方公務員田中重勝さん（四四）は、岐阜骨髄献血希望者を募る会の代表だ。募る会が発足したのは九二年四月、岐阜市内で開いたシンポジウムでだったが、このとき白血病患者の中堀由希子さんが初めてマイクを握り、ドナー登録を涙ながらに訴えた。

田中さん自身は、高校生だった十六歳の春に初めて献血をしてから、機会あるたびに献血をつづけ、アイ・腎バンクへの登録も済ませていた。

「ですから、名古屋の募る会が発足したのを知ったとき、当然のように登録しようと考えました。でも、アイや腎と違って、骨髄液は生きているうちに骨の中から採取すると聞き、それ以前に採取

中の映像をテレビで見て、勝手な思い込みだったんですが、脊髄から採るんではずいぶん痛いだろうと、少しばかり躊躇しましたね」

そこで、献血をしている職場の同僚に声をかけたところ、ひとりが応じてくれた。一緒になって、採取方法や全身麻酔のあり方を数カ所の病院に問い合わせて知識を広げていって、登録にこぎつけた。むろん、脊髄とは無関係であることはすぐわかった。ところが、ある病院関係者が「骨髄提供は身内でなければ、あまりしないほうがいい」と言っているのを聞いて、本当によかったのかどうか、そのころはまだ迷いがあったという。

「適合率がきわめて低いので、くじ運の悪い自分にまさか回ってくることはないだろうと、遠くの出来事のように考えていました。実際に適合する患者さんがいると知って、宝くじを当てたような気分でしたね。不安もありましたが、相手の患者さんがどんな人だろうと期待する気持ちもわいてきました」

正しい知識が得られたのは、コーディネーションが始まってからだ。田中さんが提供した当時は、骨髄移植も骨髄バンクも、一般の人々には今ほどなじみがなかった。骨髄液を採取する際の穿刺針も実物を見せられ、麻酔事故の可能性もあるのに、それでも提供する意志は変わらないのか、などと半ば脅しのような対応に、容易に決断はつかない。

「一億人以上いる日本で、私ひとりがいなくても、この社会は何が変わるものでもありません。そんなところに、私を必要としている人がいる。その人は生死の境目に立って必死に生きようとして

いる。そのために私を待ってくれている。しかも、私でなければならず、こんな私にも役立つことができるんだ――そう考えていくと、不安よりもうれしくなる気持ちのほうが、はるかに高まっていったんですね」

そうなると話は早い。同意書への署名捺印はスムーズに進んだ。

「移植というチャンスがあるのに、それに恵まれず亡くなっていくのは本当に残念ですよ。私は、患者さんは単に命が助かるとだけは考えていないんです。これは特に若い患者さんに言えることなんですが、年齢を加えていくにつれて、どんな大活躍をしていくか、未知の可能性を持っているんですよね。その可能性をある日いきなり断ち切られてしまうのか、それとも移植によって引き続き可能性として残されるのか、ということだと思います。社会の重要な人材として、やがて社会に還元してくれるものを持っているはずですから、骨髄液提供は、別の意味で社会の宝を生かす行為だとも思うんです」

＊

名古屋市名東区の会社員國持志保さん（二五）は、ドナーの中の最年少者である。きっかけは、NHKの朝の番組だった。ドナーがあらわれないまま亡くなっていく子どもの姿を知って、たまらない気持ちになった。実家は静岡県清水市だが、名城大学の学生で独り暮らしをしていたころだ。

登録して四カ月くらいのあいだに三次検査も済ませ、提供はその四カ月後あたりにしようと日程が決まるところまで、話はとんとん拍子に進んだ。

「コーディネーターの先生は淡々と説明されるんですね。『お願いします』って言われるとばかり思っていましたから、今から考えると当たり前のことなんですが、そのころは不思議な気がしました」

ところが、提供一カ月前に、癌の治療中だった祖母の容体が悪化した。提供のための入院中に万一のことがあれば葬儀に間に合わない。精神的に落ち着いて提供できにくい状況でもあり、同意書を出す前だったため延期を申し出た。

「幸い患者さんも待てる状態ということでお願いしました。祖母が亡くなったのは提供予定日の直前でした」

八二年ごろ、一家はアイバンクに登録した。祖母も一緒だったので、亡くなった知らせを受けた國持さんは、バンクに連絡するよう母の和子さん（五二）に電話した。

「母がものすごく反対したんです。骨と皮になった祖母を見て、それ以上痛い思いをさせたくないというんです。でも、本人の意志をないがしろにして、かわいそうと思うのは周りの人のエゴだと、今も母に言うんですが、それがずっと心残りでした。アイバンクに対する祖母の意志が生かせなかった責任を、私が代わりに社会に貢献したいと思いました」

その気持ちが伝わって、両親は骨髄提供には反対しなかった。しかし、大学入学からずっとつづけていた新聞配達の店の経営者が難色を示した。延期後の日程は春ごろということでまだ確定していなかったが、提供のために休みをとりたいと伝えたところ、全身麻酔の危険性をかなり心配したようだった。

「両親のところに電話があったんです。『移植には危険が伴いすぎるから、先のある若い娘さんがそこまでしなくても……』というような話だったそうです。そこまで心配していただいたことはうれしかったんですが、自分で決めたことですし、親は親で危険性も承知して同意しているのだからと、なんとか承知してもらいました。私としては、最悪の場合、今回の移植を延期せざるを得なくなったら、就職後に提供できればとも考えました」

しばらくして、ふと考え直した。自分はいくらでも待てるが、患者さんはそういうわけにはいかない。今は状態がよくても、悪くなると急速に悪化してしまう。そうなれば、必ず後悔するだろう。結果として、國持さんの提供は、入社前ということになった。

「だから、新聞配達はまだやっていたんですね。退院した翌朝はバイクにまたがって普通どおりに配達しました。支障はありませんでしたよ。そういうことより、提供してから考えたことのほうが、私には大きかったように思います。患者さんにチャンスを与えてもらったことに、すごく感謝している自分を発見したんです。人間が生きるとはどういうことなのか、生きるために何をしたらいいのか、そういうことを考える時間がいっぱいありました。ふだんの生活で考えることではないんですね。自分自身を含めて家族や恋人に語れる体験ができたことは、その貴重な機会を患者さんにいただいたんだと思っています」

國持さんは幼稚園から高校まで静岡のミッション系学校に通った。他人のために何かをすることの大切さは、ずっと学びつづけていた。

「ですから、ボランティアには何の疑問もないんです。点訳も習いましたし、困った人のために行動するのは当然のことでした。でも、それらは、一方的に『あげる』ものだったんですね。相手に感謝する経験は、骨髄液の提供が初めてです」

提供してからすぐ社会人となり、仕事の忙しさもあって、ドナー経験を公表しようとは考えなかった。

「それに、割とマスコミの耳目を引くことばかり目立って、美談中心の活動を遠めでみる感じでしたから。それが、ドナー同士の集まりに出てみて、せっかくの体験を黙っておくのはもったいないと思うようになりました。そろそろ運動に乗り出そうかと……」

そう決めた矢先に、中堀由希子さんの死去を知った。大変なショックを受け、会ったこともない彼女の死に泣きくずれてしまったという。

「ぜひ一度お話を聞きたいと思っていました。会って励ませなかったこともそうですが、申し訳ないという気持ちが真っ先に浮かんできたんです。国内にドナーがいれば、あんなつらい思いをすることはなかったはずです。私がもっと早くバンク活動を始めて、経験を基に登録を呼びかけていたら、適合する人がいたかもしれないと思うと、本当に後悔しました」

國持さんは、職場の朝礼で骨髄移植をテーマにして、まず同僚の前で話すことにした。その機会は、ほぼ毎月一回ある。シンポジウムでの〝デビュー〟は、九三年五月に東京都主催で開かれた、パネリストが女性だけの「骨髄バンク『愛をください』の集い」だった。これからは出番がうんと

増えそうだ。

＊

大阪市城東区の五十嵐多喜子さん（四〇）は、次男の紀行君（一二）が九〇年六月に再生不良性貧血と診断された。薬物療法をつづけて九二年暮れには退院したが、入院中にも病院で骨髄移植の話題が出ていた。

「朝早くのテレビを見ていましたら、慢性骨髄性白血病と再生不良性貧血の高校生が相次いで登場していて、うちにも四人分あるなと、すぐ東海骨髄バンクに電話したんです」

長男洋志君（一四）と長女玲ちゃん（一〇）は未成年だったので、残念ながら登録できなかったが、夫の久永さん（四五）と夫妻そろって登録した。

「ドナーが増えれば患者との適合確率が高くなるわけですから、患者家族がむしろ積極的に登録しなければならないと思いましたね。ぼくらは、息子のことがあるので、善意といっても半分くらいかもしれませんが、そうでない人がドナーになるということはすごい決断だろうと感服するんです」

多喜子さんの二次検査から三次検査までは半月もなく、提供までとんとん拍子だった。久永さんは製薬会社の研究員で学会と重なったため、入院には多喜子さんの母が付き添った。それが、病院を慌てさせることになったのだ。

提供当日、定刻になっても母娘の姿が採取病院にあらわれない。自宅に電話してもだれも出てこない。はて、ドナーはどうしたのだろうと、病院が焦り始めた。

「二十分くらい遅れたんでしょうか。実は、母と遠出するのは久し振りなものですから、入院前に名古屋のきしめんでも味わいましょうって、そちらに時間をとられてしまったんです。病院に着いたら先生方がホッとした様子で『いやあ来てくれた』って。そんな調子の入院でした。個室をもらって、先生が『ぼくに任せなさい』っておっしゃるから、それで安心しきっていました」

麻酔から覚めて、うまく採取できたかなと考えた多喜子さんは、見舞いに訪れた大谷さんに再生つばさの会の存在を教えられた。そのときに初めて紀行君のことを思い出したという。

「それもあったんでしょうが、考え方の変化に気づきましたね。提供前は、人の命を助けることができるんだ、という気持ちでしたが、一カ月くらいたってからでしょうか、『泣く母親をひとりでもなくしたい』という思いが高まってきました」

たまたま、再生つばさの会では主宰者の柴田明代さん（四五）が、地域ごとの活動を展開しようかと考えていたころだった。しかも、関西方面ではバンク運動が一時期、低調になっていたのが、藤岡八重子さん（四七）らの努力で復興に向かっていた。

「シンポジウムにドナー体験者として出させていただきましたし、再生不良性貧血の患者を持つ会も、これからは関西で独立してやっていくことになると思います。ただ、個人的に子どものＰＴＡの集まりに出て呼びかけたりした経験からいえば、泣く親を見たくないから移植にこぎつけたい、という気持ちが周りに伝わらないもどかしさというものは実感しました。でも、今は勧誘するというよりは、どういう病気なのかを理解してほしいと願っています。ＰＴＡでも、いろいろ質問して

くださる方はいますから、やがては登録してもらえるものと期待しています」

紀行君は九三年四月に大阪市立中学に進学したが、校長以下の学校関係者が大きな理解を示した。入学式を終えてすぐ、校長が全校集会で紀行君の病気を説明して、生徒ひとりひとりが関心を持つように呼びかけたほか、クラスに戻ってからは担任が紀行君自身に話をさせてくれた。全校の教職員、生徒が支援する姿を示すのは、全国にそうは例がない。

多喜子さんは、九二年六月十二日の奈良シンポジウムで、そうした学校の取り組みを紹介しながら、自らのドナー体験を語った。この奈良シンポは、関西での骨髄バンク運動を再び盛んにしていくため、九二年十月に旗揚げした関西骨髄バンク推進協会（会長・佐藤武男大阪府立成人病センター総長）が、協会として初めて開いたシンポジウムだった。

関西での運動をまとめるのに奔走した藤岡さんは、第一章で紹介したように、次女貴子さん（中学一年生の九〇年二月に死去）を亡くしているが、本人に告知してあったこともあって、全校で貴子さんを応援していた。生徒会が公的バンクの早期設立を求める手紙を当時の厚生大臣に出したこともある。五十嵐さんの次男紀行君を、学校ぐるみで温かく見守っていこうとする姿に、何か縁といったものが感じられる。

＊

三重県四日市市の会社員平野春雄さん（四七）＝家族とも仮名＝は、妻の豊子さん（四六）の兄を急性骨髄性白血病で亡くしている。八九年に発病した義兄は九〇年九月に四十六歳で亡くなった

が、移植に備えて親族のＨＬＡが調べてあったため、募る会の発足を新聞やテレビで見て、夫妻で登録した。平野さんは以前から成分献血をつづけている。

「発病したときは、東海バンクも発足していませんでしたし、義兄は他人に頼ることをしませんでした。症状は悪くなる一方で、寛解期がありませんでしたから、もし何かの形でドナーが見つかっていたとしても、移植はおそらく無理だったでしょう」

登録して半年もしないうちに、もう二次検査だった。

「ずいぶん早く見つかるものだと思いました」

だが、この患者とは三次検査で一致せず、その年の暮れに別の患者との三次検査が一致したのだ。

「しかも、移植は初めは春ごろということだったんですが、春になるとどうも夏らしいと……。半年待つのは初めから心の準備ができているからまだいいんですが、さらに延びるとなると『なんでもいいから、早くやってほしい』という気持ちになるんです。患者さんは病院にいるから安全でしょうけど、こちらは交通事故や食生活に気をつけようとか、酒を控えようとか、これで結構大変だったんです」

ようやく提供してみたら、提供前との気持ちの変化に気づいたという。

「よく『情けは他人（ひと）のためならず』っていわれますが、骨髄提供は言葉どおり自分のためということがよくわかったんです。酒を控えたり食生活に気をつけたりするのは、患者さんのためと思っていたのに、自分の健康のためになっているんですね」

豊子さんとは再婚同士で子どもがいないことも、平野さんにとってはかなり気が楽だったようだ。

「提供のとき、我が子のための親ごころといった感じを持ったんです。患者さんは大人の方のようですが、もし子どもさんだったら、いないはずの我が子を救ったという気持ちになったと思います。全身麻酔もあるので提供には勇気が必要だといわれますが、私にとっては、勇気はそう必要がないと思いました」

相手は平野さんより身体が大きかったようで、骨髄液も通常より多めだったらしい。腰の骨からだけでなく、胸の骨からも採取された。

「ガーゼが張ってあってわかったくらいで、腰も含めて採取場所の痛みはそうありませんでした。麻酔が切れるとずいぶん痛いと聞いていただけに、問題らしいものは何もなかったといえます」

勤務する会社の周りにある会社に、バンクのポスターを張ってくれるよう頼んだり、自宅の自治会にパンフレットを回覧したり、ささやかな活動を進めているが、シンポジウムにも三回ほど参加し、匿名ながらドナー経験者として体験を語った。

＊

埼玉県浦和市の主婦墨田繁子さん（五一）＝家族とも仮名＝は、ドナーの最年長者である。提供前の自己血採血の日が、ちょうど五十歳の誕生日だった。

次男の明彦さん（一九）が埼玉県立高校二年の陸上部で練習中、あまりの調子の悪さに帰宅を勧められ、近所の開業医を訪れたのは、九一年七月である。二日後にもう一度採血され、五日後には

県立病院に入院した。重症再生不良性貧血だったのだ。血小板は、六千しかなかったという。

「たちまち準無菌室への入院でした。家庭医学書を見たら、死亡率が九〇パーセントって書いてあるんですね。でも、次男はきっと残りの一〇パーセントに入ると信じきっていました。それに、医学書はずいぶん古いもので、病院では七〇パーセントと聞かされ、思わず『死亡率はそんなに低いんですか』って、言ってしまいました」

薬物療法を受ける明彦さんに、ずっと付き添っているわけにもいかない。再生不良性貧血の情報も乏しかったから、墨田さんは骨髄移植のシンポジウムなどに積極的に出席し、情報収集と勉強にも努めた。

「最後の手段としての骨髄移植なら、危険を覚悟で受けさせたいと思いました」

明彦さんが入院してすぐ、家族全員のＨＬＡを調べたが、一致しなかった。主治医の勧めで、明彦さんは東海骨髄バンクに患者登録をしたが、ドナーは見つからなかった。

ところが、入院から二カ月半ほどたって、明彦さんの血小板が急増を始めた。三万にもなったのだ。なんと、十月には退院にこぎつけるまでになった。本当に病気だったのかと疑いたくなるくらいの、いかにも早い回復ぶりだった。

退院を機に、長女の睦美さん（二五）と長男の和也さん（二二）も、墨田さんとともにドナー登録をした。夫の徳治さん（五七）だけは、年齢超過で登録できなかった。

「奇跡的とも思える好転への感謝の思いと、患者や患者家族のいたみに、少しでも寄り添えられれ

ばという気持ちからですね」

明彦さんは、退院からほぼ一年後におこなわれた二十七キロ競歩の全校大会に、二時間ちょうどでゴールインし、約千人の生徒の中で七位に入るほど元気を取り戻した。

HLAのデータはすでに登録してあるから、墨田さんにいきなり三次検査の要請があったのは九二年になってからだ。最終同意、そして提供と、とんとん拍子に進んだ。

「次男の病気を知らされたとき、最初はショックでしたが、ありうることとして受け入れましたから、このときも『あら、よかったわ』ということくらいにしか感じませんでした。だって、私は七人きょうだいの末っ子ですから、祖父母の死を含めていろんなことを見ていますし、新聞を読んでもいろんな出来事が出ていますから、それほど大仰には考えませんでした」

それだけでもない。墨田さんはクリスチャンでもある。明彦さんが発病したときも、毎日曜の礼拝には欠かさず出席した。信者仲間も一緒に祈ってくれて、その点では孤独に陥らずに済んだのがよかったという。

「クリスチャン同士ならすぐ理解しあえても、そうでない人にはキザに聞こえるかもしれませんが、これは『神のご意志による計画かな』という感じが、確かにありました。キリスト教では、悪いことをしなければそれでいいというものではありません。知っていて、できるのに何もやらないことこそが、罪なんです。次男の病気をとおして、骨髄移植のことを知ったんですから、ドナー登録も提供も、本当に当たり前のことなんですよ」

それだけに、名古屋の病院での骨髄液採取に当たって、不安はほとんどなかったという。むしろ、いたって楽天的だった。

「おさんどんばかりの毎日ですから、三食に昼寝がついているのは最高だなんて考えていました。それに、自分の命に対して『これは私の命』としがみつきたくないんです。麻酔から覚めて、痛みがあることはあったんですが、それは覚悟していたことですからね」

とはいうものの、三泊四日の入院生活を終え、帰宅してから体調を崩し、パート勤めを一週間ほど休んでしまった。

「なんだか、気持ちが落ちこんでしまったんです。貧血があったのかもしれないんですが、提供までにけがをしてはいけないとか、ずいぶん緊張していたらしく、提供後ホッとしたことも手伝っていたんでしょうね」

体験を語り始めたのは、九二年の埼玉シンポジウムが初めてだが、その後も神奈川や新潟に出向いている。だが、墨田さんは明彦さんが発病してすぐ、埼玉骨髄バンク推進連絡会に入会した。書き損じはがきの整理をはじめ、シンポジウムでの受付や接待役など、いわゆる裏方のボランティアも務めてきたのだ。

中学からミッションスクールで学んだ墨田さんは、二十年来のボランティア経験がある。今も、乳児院で洋裁の奉仕をつづけているほか、障害者などのボランティアを手がけており、骨髄バンク以外でも幅広い活動に取り組んでいる。

たかもしれません。ただ、『寄付控除があれば出せるのに』という言い方をする企業があるんですが、寄付金を出さないための理由づけだったかもしれないんですね。でも、やはり控除があるにこしたことはありませんから、財団としては集めやすいでしょう」

会計面から内部を支えてきたのだから、自らの入院体験よりも、日本骨髄バンクへの提言のほうが多そうだ。

「寄付控除があれば集めやすいはずなんですが、それを全国単位の運動のままにしておいては、そうは集まらないでしょう。地方支部の単位で、ドナー登録へのPRと寄付金集めをやってこそ効果があると思いますし、その実現が急務じゃないでしょうか。それに、支部が実現するとしても、事務局を大学病院の片隅に置いてやろうなんて、どだい無理です。きちんとした場所を確保すべきですね」

さらに、広報活動と患者家族のドナー登録も大事だという。

「コマーシャルをいかにうまくやっていくかということは、例えばドナーと患者さんが握手をしている場面というものを含めて、もっとオープンにすべきでしょうね。患者家族の登録については、宗教観の違いや患者さんへの告知の有無など、難しい課題も抱えていますが、患者家族が積極的に登録すれば、それだけで数万人の単位でバンクはふくらむんです」

＊

愛知県の団体職員蔵本徹夫さん（三九）＝家族とも仮名＝もバンク関係者だが、もっと密接なか

かわりをしてきた。蔵本さんはボランティアでドナー登録管理部を担当していたのである。ドナーのHLAデータとの適合性検索のため、登録患者のHLAデータもじかに扱う立場にあった。自身はまだドナー登録をしていなかったが、立場上、自分のHLAは知っていた。ある日、登録患者のデータを入力するためパソコンを操作していたら、自分と同じHLAのデータが出てきた。

「私のHLAはそう珍しいほうではないので、とうとう適合する患者さんがいたなと思いましたが、戸惑いのほうが先でしたね」

守秘義務を盾に、そのまま黙っていれば、だれに何を言われることもない。しかし、そうすることが、社会人としてふさわしいかどうか……。しばらく迷った。だが、せっかく適合する患者がいるのを、みすみす見過ごすわけにもいかない。

蔵本さんはすぐにドナー登録をした。バンクが発足して、まだそれほどたっていないころだ。誤解を生じるといけないので、念のため書き添えておくと、患者のHLAはデータとして表示されるだけで、住所や氏名、年齢はわからない仕組みになっている。蔵本さんといえど、同じことだ。

「ところが、女房が反対しましてねえ」

妻の栄子さん（三七）は薬剤師だから、全身麻酔の事故がたまにあることくらい知っている。骨髄液提供のときだけ麻酔が絶対に安全というわけではない。だが、夫の性格もよくのみ込んでいた。

「言い出したらやめないものねって、一週間後には認めてくれました。それでも今度は、条件として、私の採取現場に立ち会いたいと言いだしたんです。心配してくれているのはわかるんですが、

手術室に入るわけにはいきませんから、そこのところはコーディネーターから説明があって、妻は納得しました」

採取のあいだ、栄子さんは病室で待機していた。

蔵本さんは気道チューブが外された瞬間、無意識のうちに「ありがとうございました」と繰り返していた。

「苦しかった気道チューブを外されて楽になったからと思っていたんですが、冷静に振り返ってみると、生きているという実感が沸いてきたからなんですね」

見舞いに来た医師である父の三男さん（七〇）は、息子の提供に触発されたのか、アイバンクと腎バンクに登録することにしたと告げていった。

「私の骨髄液が患者さんに無事届いたという連絡を受けたときは、ジーンときました」

退院して一週間後には、テニスで思いきり汗を流した。

＊

ドナーのうち三人はクリスチャンである。前に登場した最年長ドナーの墨田繁子さん（五一）＝仮名＝は、動機が次男の病気だったが、残るふたりは、キリスト教関係の新聞がきっかけだ。そこには、広島県因島市のバプテスト教会牧師林原弘さん（四九）の長男信秀さん（一九）が、慢性骨髄性白血病でドナーを探しているという記事が載っていた。

愛知県大府市の主婦山田久美さん（三二）は、夫の直樹さん（三二）ともども登録したが、三カ

月目に二次検査、さらに二カ月たらずで三次検査となって、あまりの早さにびっくりした。

「詳しい知識がなかったものですから、そのつどバンクのパンフレットを読んで、追いかけるように勉強しました。心配したのは両親です。私自身もともと強くない体質なので、人助けして当人が寝込んでしまったらとか、二人の子どもが小さかったので、もっと大きくなってからでいいんじゃないのとか、ずいぶん言われました」

たまたま同じ教会の信者仲間の子どもが、白血病で入院した。

「ご両親がどんな悲痛な表情で教会に見えているかという話を両親にしました。それに、当たる確率が宝くじみたいなもので、私を待っている人がいるという現実は今しかないわけですから、何年か先にはその人はもうこの世にいないかもしれません。私を待ってくれている患者さんのご両親も、教会の信者さんと同じ思いでいるにちがいないんです。そういうことを伝えて、最終的には私と主人の判断に任せてくれました」

直樹さんは転職してすぐで有給休暇が少なかったため、提供は社会的に連休がとれる時期を選んでもらった。ただ、事前の検診や自己血の採血にてんてこまいした。

「幼稚園児の上の子が、同じ時期にヘルニアの手術を控えていました。下の子は一歳でしたし、とても何回も足を運べる状態ではなかったんです。それで最終同意のときに、健康診断と採血は同時にとお願いしてあったんですが、病院のほうに話が伝わっていなくて、採血してもらえませんでした。子どもの手術を先に延ばそうとも考えましたし、何が何やら頭の中がパニック状態になりまし

た。聞いたことと、目の前でやってくれることが違うので、人助けも大変だと思ったものです」

改めて出向いた採血は一回で済み、長男の手術も無事終わったが、山田さんには提供までのあいだ、長男の予後が悪化しないよう、そして自身交通事故などに遭わないよう、非常に気を使ったという。

「麻酔が覚めてみて、患者さんがお子さんだと聞いていたせいかもしれませんが、お産のときのように、子どもが生まれてきたときの喜びに似た感動を味わいました」

信者仲間の子どもは、山田さんが入院する一週間前に亡くなった。クリスチャンとしての気持ちはどうだろう。

「提供は神様からいただいたチャンスだと思います。教会の女の子の闘病と同時進行の形でしたから、彼女には直接役に立てないけれど、これは神様が立てた計画かなと感じましたね」

退院後は、長男が肺炎になったりして落ち着く間もなかったが、今は当時を振り返る余裕が戻っている。

「骨髄移植は、顔の見える医療になってほしいですね。具体的には、相手のことを相互にある程度教えてくれてもいいと思うんです。アメリカでは患者さんもドナーも同じ病院に入るといいますし、こういうことでもなければ知り合えない人なんですから、もう少しゆるやかであっていいんじゃないかしら。それと、ドナーもずいぶん犠牲にして提供に臨むんですから、バンクと医療機関はドナーとの連携を十分にとってほしいですね。お医者さんには何度もの経験でしょうが、ドナーにはた

った一回なんです。一時は『こんなに厄介なら、もう辞退しようか』と思ったくらいです。でも今は、適合する患者さんがいれば、また提供していいかなって思っています」

＊

愛知県西春日井郡の会社員伊藤賢治さん（三六）＝仮名＝も、山田さんと同じキリスト教関係の新聞で、林原信秀さんのことを知った。その前にアイ・腎バンクにも登録している。

「アイバンクと腎バンクのときはしばらく悩んだのですが、聖隷ホスピスの牧師さんの話を聞いてふんぎりをつけましたから、骨髄への登録はその流れのようなものでした」

三次検査を終えてから、妻の反対に遭った。

「麻酔の危険性からですね。私自身は、登録から割と早い時期に検査が進んだので、いよいよきたかと気持ちが燃えているところだったんです。時間があいてしまったら、気持ちが引けたかもしれません。適合したのは神様に指名されたようなものですから、神様がすべて守ってくださるということを説明して、女房も一週間くらい考えていました。結局、今回だけということで認めてくれましたね」

びっくりしたのは、麻酔が覚めてからだった。

「ベッドの周りに、関西に住んでいる私の父や、女房の父などが取り囲んでいるんですよ。義父は『人のためになったんだからよかったな』と言ってくれたんですが、兄は『今回かぎりにしろよ』と言うんです。病室でゆっくり休むどころか、こりゃ、おおごとになったなと、周りに気を使って

疲れてしまいました」

伊藤さんの骨髄液は、二百五十ミリリットル程度だった。相手が幼児らしいと知って、ふたりの我が子とオーバーラップすることもあるという。

「特別に人助けをしたという気持ちはないんですが、自分の子どもが同じ病気になったら、なんとしてでも助けてやりたいと思うはずですね。我が身に降りかからないとわからないということは、今後の移植医療を考えるうえで大事ですよ。医療サイドが患者さんの気持ちを先回りして『だから、助けるために提供を』と勧めるのはまずいと思います。患者さんの叫び声が、もっと身近に聞こえてこないといけないんじゃないでしょうか」

神を信じている証として提供したけれど、だからといって突き詰めた考えにはならないという。

「信仰がなくて提供する人はすごいですよね。そういう人たちの話を逆に聞いてみたいと思います。そもそも私は、単に命を助けるためだけに機械を使って高度な医療を施すことに疑問を持っています。死ぬことにも意義があると思います。私は神様を信じる者として、生きようと死のうと、いつも感謝していたいと思うんです」

＊

愛知県江南市の看護婦鈴木陽子さん（三一）＝家族とも仮名＝は、名古屋市内の大病院で血液内科の看護婦として勤務しているときに登録した。

「血縁者間移植には二十数例に立ち会ってきました。登録する三年くらい前からずっと迷っていた

んです。化学療法で治っていく患者さんや、逆に移植してから亡くなる方などをみてきましたので、移植がベストとはいえないという気持ちがあったからですね。でも、患者登録をしている人は、さまざまな背景や思いがある中で、治療方法として移植を選択したり、移植しか手段がないと判断したりして、移植にかけている人たちだろうと考えて、そういう人たちに提供したいと思ったんです」

登録した時点で両親には話した。しかし、検査が進むにつれて提供が現実味を帯び始め、そのつど詳しい説明を重ねてきたが、最終段階になって母の幸子さん（五二）が反対した。麻酔事故を心配してのことだ。

「親がそう言うのなら、提供できないかもしれないなって思ったんですが、最終的に母が納得したのは、私の意志が堅かったからということではないでしょうか。それ以外にはなかったと思います」

提供に当たって困ったのは、休みの確保だった。そのころ勤務していた病院では、パート採用だったので有給休暇はない。それにひとりでも予定外に休むと、同僚の仕事が加重になる。

「でも、その病院にも血液の患者さんが大勢いましたから、事情を説明したら理解してくれるスタッフばかりでした。それと、これは偶然なんでしょうけど、その病院の先生がコーディーネーターだったんです。同僚たちは、逆に『欠勤扱いになってかわいそうね、頑張って』って励ましてくれました」

提供自体は、大それたことではなく、献血の延長と考えている鈴木さんだが、看護婦の仕事をつづけていく上では、結果として役立っているという。

「今の職場は個人病院で、外科手術を受ける患者さんが多いんですが、全身麻酔を一回経験したということは、術後に『大丈夫ですよ』と告げるのでも、真実味が加わるというか、未経験で言うのと違うと思います。ただ、そのために提供したわけではありませんし、変に誤解されては困りますから、ドナー経験を患者さんに語ることはありません」

＊

愛知県高浜市の会社員木舩有二さん（三三）は、本人も言うように、いっぷう変わった動機で登録した。

「企業内学校で教えているときだったんですが、生徒の一人がある宗教団体に入ってしまって、彼を引き戻すための活動をやったんです。調べてみると、その団体は表面的には非常に素晴らしいことを言うんですね。これに太刀打ちするためには、私自身何かをやる必要があると思って、骨髄バンクへの登録もそのひとつと考えました」

生徒の引き戻しには、彼の両親とも協力したのだが、結果的に成功しなかった。あとには、骨髄バンク登録が残ったことになる。

「提供はまだかまだかといった気分で待っていましたから、連絡があったときは『ついにきたか』という気分でした。職場の上司は子どものころお兄さんを白血病で亡くしていましたので、すごく協力的で『ぜひやってこい』って言ってくれましたし、四泊五日から帰ってきて、同僚にも体験を聞かれました」

職場の雰囲気は温かかったわけだが、木舩さんは〝骨髄液提供唯一主義〟ではない。

「私自身の考えは、提供にしても人生観から導き出した結論のひとつなんです。白血病だけが重病ではないし、病気だけが社会の問題ではありません。だから、タイの中学生にわずかながら援助をしたりと、そういったことをやっていますので、提供したからって『えらいね』なんて、言われたくないんですよ」

それでも、全身麻酔への不安はあった。

「お医者さんに説明を聞いてから、完全に意識がなくなるし、危険性もあるからと知って、少しは気持ちが揺らぎました。それに、これも企業内学校の生徒なんですが、提供の一年ほど前に事故を起こし、一カ月ほど植物状態のままで亡くなったことがあって、もしものことがあれば、生徒のように人工的に呼吸だけはして生き延びさせられるのは嫌だなということを思い出したんです。でも、最終決断に当たっては、これからの人生を考えると、ここで挫折したら一生の悔いになるだろうし、決めたからには最後までやり遂げたいと思いました」

六人部屋に入院した。ドナーは個室に入るのがほとんどで、病室は複数部屋でも、いるのはドナーだけというケースが多い。が、木舩さんの場合は、患者と一緒だった。

「私にとってはいい勉強になりました。みなさん血液疾患でしたが、それぞれが病気に対して頑張ろうと、患者さん同士で助け合っている姿を目の当たりにできたんです。ひとり、高校生くらいの患者さんがいて、年配の人たちが病気のアドバイスをしながら、少しでも命を延ばそうとしている

姿には、頭が下がりました。私が提供するのは別の病院の患者さんなのに、『ありがとうございます』と言われましたし、術後にも気をつかっていただきました。滅多に経験できるものじゃありませんよね」

病院では個室のやりくりが、どうにもこうにもつかなかったからのようだが、木舩さんは医師の配慮かと思ったという。

「一般的には『骨髄移植イコール大手術』というイメージが強くて、確かに患者さんには大手術でしょうが、今回の体験を通じて、提供者にとっては献血より少し大変かな、という程度のものだと感じました。ただ、人によっては注射ですら嫌がりますから、強制はできませんが、少しでも多くの方がバンクに登録されて、それによって、あの病室にいらしたような患者さんが、早く元気になることを望みたいですね」

＊

ドナー群像の最後は、名古屋市北区の野村秀樹さん（二九）である。なぜ締めくくりに登場願ったかといえば、野村さんは提供した患者を知っている。残念ながら亡くなってしまったが、患者家族もドナーが野村さんであることを承知している。双方が相手を確認しているのは、東海骨髄バンクでは唯一のケースなのだ。

野村さんは、新聞によって大谷さんの活動ぶりを知り、さらに献血ルームに置いてあったバンクのパンフレットによって、献血と同じものだという認識で登録した。名古屋大学医学部の学生のころだ。

「基礎を勉強していた時期ですから、骨髄移植については提供の日程が決まる少し前から調べました。それにしても、登録四カ月目に三次検査ですから、正直いってこんなに早くていいものかと思いました。患者さんの力になれるチャンスを与えられて名誉だと感じましたね」

野村さんは東北大学の理学部で地球物理を学んでいたころ、理論や実験を積み重ねて、それが世の中にどういう意味があるか疑問に思っていた。人間をもっと身近に感じられる職業、具体的には医師になるのが一番だと、名古屋大学を改めて受験しなおしたのだ。

「医学生の立場として、入院もいい経験だと思いましたが、ドクターはぼくの経歴を知っているのか、過ごしやすい入院生活になりました。ただ、全身麻酔は身体的な侵襲がかなり大きいので、安易に人には勧められないと感じましたね。提供に迷っている人がいれば、体験を披露してもいいとは思っていますが、積極的に話そうとは考えていません」

提供した患者のことを知ってしまったのは、実は母の和子さん（五三）が看護婦をしていて、和子さんの同僚が、患者の義理の叔母だったからだ。患者の移植は他県の病院で、普通なら互いにわかるはずもないのだが、提供も移植も同じ日であることから、骨髄移植を話題にしているうちに「あれ」「それじゃあ」ということになったらしい。

患者は移植後、ほぼ二週間で死去した。患者の妻から手紙が届いた。

「初めはショックでした。移植をしたからといって必ずしもすべてうまくいくわけはないというこ

とは、知識としては持っていても、自分が提供した人はうまくいっているはずだという気持ちがありますからね。移植してすぐですから、結果的にぼくが提供したことによって、その方の命を縮めたのではないかと考えると、提供したことがよかったのかどうか考え込んでしまうんですよ。それに、もっと早ければよかったのかとか、病院が違っていたらどうなんだろうかとか、いろいろ考えてしまいました。少なくとも、あのとき移植をしていなければ、もう少し元気で過ごす時間があったと思うんです。でも、ぼくが医師になって患者さんの家族に相談されたら、治る可能性にかけたいと思いますから、治る率をきちんと申し上げて移植を勧めると思います」

野村さんは九三年三月に卒業した。この年の医師国家試験で、野村さんと同級生は全員が合格した。快挙といえる。野村さんも四月から、研修医の道を歩み始めた。内科医になろうとは思っているのだが、その先の専門を何にするか、まだ決めていないという。